

# 海阪

北原白秋

青空文庫





道のべの春

## 半島の早春

## 三浦三崎

大正十二年二月一日午後、何処といふあてもなくアルスの牧野君と小田原駅から汽車に乗った。その車室に前田夕暮君が居た。何処へ行くと訊かれたのでまだわからぬと答へた。君はと云つたら大島へ行くつもりだつたけれど汽船に乗り遅れたので引返すところだと云つた。ぢやあ一緒に何処かへ行かう、それもおもしろいと云ふ事になつた。で結局三崎行ときめて、横須賀へ出た。出て見るとその駅の前にはもう薄ら寒い日の暮の風が吹きしきつてゐた。

## ぼろ自動車の上

日の暮のぼろ自動車にすくみるつ赤き浮標見居り乗合を待ちて

風空に造船場の高く赤き鉄柱が焼け暮ならんとす

日暮れぬ路いつばいに埋まり来る職工の群にひたと真向ふ

前まへと堰き溢れ来る人の顔どれもこれも青し押しわけてゆけば

雪のこる片山蔭の板びさし今は見て安し灯あかりがつ点くも

外見ると幌ひきはづす手のつめたさ遙かの不二は吹雪雲の影

雪ふるは天城かと見る次の眼に夕焼の赤きまばら松見ゆ

山峡を遥に小さき人の影寒むざむと追ふ斑雪ぬかるみ  
はだれ

山間に愛し小さしと見し人が窓際に避くるこれの猿面  
やまあひ  
かな  
よ  
ざるづら

遥かの山ぎざぎざに白し半島の上をわが自動車はまつしぐらなる

### 良夜行

あまりに月が良いので自動車を下りる。三崎の一里てまへ、引橋の茶屋の少し  
 先き、そこらが半島の最も高い道である。

この空の澄みの寒さや満月の辺に立ち騰のぼる黄金こがねの火ひの立たち

満月の辺に立ち騰のぼる炎こなの粉宵空の澄みに澄み消けなむとす

山は暮れぬましぐらに駛はしる自動車の真正面まともの空の宵の満月

月明き半島の夜を歩まむとし汐ふかき風をまづ吸ひにけり

とりどりに歩む姿ぞおもしろき松の並木のきさらぎの寒を

青く真澄む幻燈の空に枝さしかはす山松が景も早や二月なる

月の坂に我ら追ひ越す自動車の埃の立ちの秀ほの青さはも

太鼓うつ音のきこゆる月の森そこかここかと聴けば遠しも

おのづから岡の歩みは太鼓うつ月照る磯に近づきにけり

北条入江

この廓さとは燈とも火しび紅あかし草臥れて雪どけの道を行けばひもじき

宵はまだ月の入江の枯葦の影くきやかに汐あかり満つ

枯葦や入江の瀉にのる汐の上づら寒し月はかがよふ

月と太鼓

私の雲母集中の異人館はその後海嘯で流されたとかで、  
もはや跡方もなくなつてゐた。

今は無き我家の跡に櫓かけて磯の良あらたよ夜を子ら太鼓うつ

月がたたく太鼓ならしとおもひきや我家の跡の子らが興なる

春あさき囃子と求め来て月の磯の我家の跡の汐あかり見つ

来て見ればいよいよ近き月明り通り矢も見ゆ城ヶ島も見ゆ

照り曇る月の夜ながら小童<sup>こわらべ</sup>がたたく太鼓の冴えの愛<sup>かな</sup>しさ

童らがたたく太鼓は月の夜とこだましにけり島の森より

何がなし心安きはたぶたぶと石垣をうつ満ち汐の音

### 臨江閣

元の私の家の隣である。当時親しくしてゐたその家も代が變つて今は旅館になつてゐる。ここに私達は泊ることにした。

この宿は小松にまじる枯葦の影し騒げど月明りせり

月明く風やや烈し湯をいでてさやぐ小松の影を見てゐる  
あか

沖釣の宵の夜ふけの漁火の繁く遥るけき憂世なるかも  
いさりび

灘遠く連れてまたたく漁火の風のこなたの月夜さざなみ  
いさりび

あれだあれだ城ヶ島のとつぱづれに燈台の灯が青う点いてる  
ひ

雨雲に月飛ぶ迅し旅蒸氣のマストは青き燈をかかげたり  
たびぶね

この宿の生洲の汐に映るもの石崖と岩の墨いろの影  
いけす

友よ飲まむ寂しと言葉落したり音せぬは汐も満ちたるらしき

草臥ぶれておのれ素直になりにつけり酒やふふまな歌はせ女子をなご

われ酔ひぬ君もうたへよ童わらべうたうたひ遊ばむあはれあはれ酔ひぬ 戯れて三首

頭に火をつけよ線香花火の火の粉こなの松葉菊ちふ華はなも咲かさな

童うた「金魚の鉢」ぞあなかしこおのれよろしよ「金魚の鉢」は

八景原

二月二日八景原に遊ぶ。

椿

この坂の椿の紅さ先のぼる一人は早くも佇ちて仰げり

女仏

あなかしこ女<sup>にょぶつ</sup>仏なりけり触り<sup>ひゃ</sup>冷き石にてはませど常ならず見ゆ

つめたけど触りて愛<sup>かな</sup>しと惚れてしが石の女仏の眼<sup>ま</sup>眸の露けさ

椿葉の冷え<sup>ひ</sup>の明りに浮き立たす石の仏のほそり肩はも

崖の上

崖の上の高畑道のはだら雪踏みほそりつつ一人は遠し

日は高きに雪と小松のほそり道人には逢はね下は波の音

振りかへれば振りかへり見つ荒布採りの海女一人が籠は紅つばき挿す  
 雪うすき小松が間に啼く鳥は頬白か否か春も浅きか

八景原

昆布噛み冷酒ふふむと昼磯に集へどさびし一面の照り

はるばるに潮満つらしく思ふとき手をかざしたり迎への舟より

午ちかきひたひた潮の岩照りを迎への舟が揺れてはひり来

舟上

## 八景原より城ヶ島へ

昼潮の照りの明りに漕ぎ馴れて遠く遊びし昔かなしも

昼潮に雙手ひたして思ふことかく父母と常に遊びき

満潮のゆたのたゆたに揺れゆかなゆくらくらゆくら漕げようつらうつら行けよ

昼潮の満ちのたたへに漕ぐ舟のねもごろにとろき櫓の音となるかも

## 城ヶ島

二月二日午後

萱原

萱わくる音こそすなれわがほかは先ゆく人も遠しと思ふに

萱原の萱の遙かに思はずも先ゆく友が頭見せたり

萱刈る人ひとり居りけり枯れかれし萱の中ふかく身をうづめつつ

島山に深き萱刈る鎌の音青空にひびき闌たけんとす、昼

日小さしまだ遅からず仰ぎ臥ねて萱刈る音の刈り深む聴く

老媪

草刈りの七十ばかりのお婆さんに前田君がたづねてゐた。「お婆さん、この島でも盆踊の歌があるかね。」「お盆には無えだ、お正月には盆踊があるだ。」「なんと云ふ唄かね、」お婆さんはどう思つたか、ふと唄ひ出した。おもしろい手つきをして、唄つてゐる時はなんとも云へぬうれしさうな若やいだ顔をしてゐた。が唄ひをはるとむつりとした元の顔になつて黙つてまた刈り初めた。その唄はかうである。

つくばねの峰より落つるみな  
の川恋ぞつもりて負けてやる。

私たち二人は腹をかかへて笑った。さうしてまた寂しくなつて了つた。

萱刈りやめをうな媪はうたふ日ののどかなんとその眼のうれしさうなる

歌ひをはり済まぬ顔しぬ島媪また枯草を刈りいそぎつつ

媪居り萱を刈りけり子らは来て萱を負ひけり日のちひ小さき

萱負ひて子らは子らとて下りゆけり媪は刈りぬひたむきの刈り

島鶉

島鶉啼きつと思ひぬ深き萱のそよぎの照りのしづもりの中に

島山の萱の閑かに鶉しづゐて啼くなる昼は雌めもこもり啼く

すれすれに鶉飛び立つ萱の風また一羽立ちぬこもりたらしも

遊びが崎

昼潮に櫂臍漕ぎ落し思はずも幼なごゑ立てぬそれがをかしき

大椿寺

同日薄暮、城ヶ島より宿へ帰つて後、散歩のついでに立ち寄つて見た。椿御所がこれである。宿の近く、同じ向ヶ崎にある。

この寺が大椿寺ぞとはひり来て寂しと出でぬ日暮を二人

この寺も古うなりぬと陽の隈に尿しつつ云ふ我も寒むかり

さびさびと暮れしづもれば磯寺の障子はかげる寒しとなしに

長井

二月三日薄暮、三崎より乗合自動車での帰途半で下車、長井で一泊することに  
なつた。翌四日、その磯を散歩し、裏道から県道へ出、逗子行の立場まで行き

その日暮れに其処を立つた。その間の所見である。

水あかり

黒川の浅夜の冷ひやき水あかり江につづくらし広しほざき汐あ騒み

黒川の葦辺の冷ひやき水あかり夜汐かまじる暗くにほへり

川かはま間ま橋はし何か藻くづの青めくは夜釣よつりのさしてにほふならしも

安旅籠

この晩は少し疲れて苦しかった。心臓を弱めたのである。

灯ひのもとに夕餈さやの騒あぎ露あらはなるまづしき磯に行けばひもじさ

磯宿は下の祠ほこらに提燈つが点つき白くい幟の月と風です

安宿のこれの硝子戸の夜風に鳴り佐島あかりの燈うつつなく見ゆ

磯宿のこの婢はしため女が言なきはまたくつめたき鱗うろくづがどちか

友とゐてさびしとは思はね一つの蜜柑いつまでもむきて酒うまからず

寂しけどなにか今宵の気の安さこの磯宿の磯香くさきも

鬮子の函

雨かとも夜すがらききし点滴は朝起きて見れば幟竿の揺れ

この磯は半ば枯れたる浜木綿はまゆふの日向かがやかし鰯子しこの函干す

磯に干す鰯子のかがやき目馴れねばうら寂しかり朝の餉けはまだ

まじまじと眺めて蜜柑むきるたり硝子戸越しの鰯子あさこの浅照り

今朝はまだ太鼓たたかず磯の鼻に竹馬の子が遠く沖見る

入江の波いまだかがやかずつつましく箸さしおきて今朝いとま暇あり

遠浅の春さきの江か今朝は晴れて風烈しけれど波の穂低し

風波の穂立の迅さあさあさ浅々あさあさに見えつつは走れ白く白くかへ翻る

春と云へど横の出崎の日あたりもまださむぎむし枯木三四本

寒い風の入江の潮にすれすれ出てる枯草の島に日があたるところ

海苔

潮ふくむ浅きみどりの青海苔のすのこすのこ簀すのこ々を嗅げば春なり

この朝や風は高けど片磯の石垣に青く海苔すのこ簀干す

老らくの寂さびしさびごころか浜へ出てかけろ鶏追ひゆく万祝衣まいはいのをぢ爺

小竹の村

この磯は枯小竹多し行くところ吹かれ吹かれぬ小竹あらぬなき

磯村は風を荒みか背戸ごとに矢竹篠竹家垣にせり

家垣の篠の枯藪風をしげみほほけなびけり窓の障子に

この枯れし竹は矢竹か女竹かと立ちとまり見つつ見つつ行きけり

家垣の矢竹の裏の紅つばき咲きにけらしな花二つ三つ

丘窪

丘窪は刈田の泥も刈株もさびつくしたれ日のあたりつつ

丘窪は刈田に泥ぢし稲株のさびさびにけりそのこちごちに

丘窪の刈田のへりの溝川の青の水藻は目に新しき

群松の日かげのあをきはだら雪見て通るなりこころ冷えつつひ

日のあたる枯篠藪の円丘のところどころのしら梅の花

目にとめてはや寒からず柴刈る子ら日あたりの丘に何か笑へり

日蔭田をむつりむつりと群れ来る子ら早や日あたりへ一人は出づも

何祭る二月の子らぞ青榊手に手に持ちてつつましく来る

春浅き片山蔭の女松原つばらつばらに日のあたりたり

岡裾も青みそめたり肥こえやると揺れかつぐ影もはや寒むからず

牛ひとつほつり出たり下丘の日照る畑の青きはづれに

雪ふかき窪田の畔の蚕豆のみづみづしさに見ておどろきぬ

誰かゝる豚小屋のぞく日のいとま安けからしと見て通りある

春あさき小葱がそばの草ぐみの実のつめたさを食べて見んとす

立枯銀杏

目にとめてはや寒からず冬銀杏かうかうと白う寂び明りたる

銀杏の立枯の枝の白金光のほうほうとして実にごまかさ

暇あり

梅はまだそこらここの雑木山眺めつつ行かな遊び遊びに

たまさかの暇いとまいただき出て遊ぶ二日三日ゆゑいよいよ愛かなしも

高畑道

風烈しき高畑越えて耳やわ柔き斑まだらの仔牛道はかどらず

青麦の高畑道の日の光斑らの仔牛眼もさだまらず

春はいまだ風かはげしきこの丘や警報球を赤くかかげつ

## 風の下り坂

雪どけのぬかるみ坂を吹きあぐる早春の風はまだ頬につめたし

浅黄の外套に頬かむりしぬこの風の磯山道は梅ところどころ

## 長井遠望

かくばかり小竹多き磯と知らざりき通り抜けて薄き陽ざしに見れば

ここから出て見ようかと出て見てる洲崎の下の小竹の薄い陽

薯がらの小積こづみのかげだ吸ふ煙草だ早春の出洲の烈風を除よけて

## 県道へ出る道

道を問へばどの家も障子ひらかずしておつとりと答ふ午の里なる

早や青む畝うねの車前草おほぼこつめたよと踏みつつ伝ふ友が後べを

風冷ひやき棕櫚の根方に尿して日向を走る子が前の矮鶏ちやぼ

林新道

向うの切りくづし崖の黄の壁に陽があたつてる菜畑も見えて

もう春だ春だほうれトロツコが走る走る走る誰か手をあげる

あの頃のあのこころもち手をあげてトロツコで走るちやうどあれです

どこやらから春が来さうな雪の後あとですトロツコの土つちの東風です  
さうだあの気合ださうださうだ一息に迂るトロツコの走り

入江の上

引き潮にほとほと涸れし江の上かみの隣田寒し藁のみ積みぬ

潮の路こちごちに光れ黒き洲のおほかたは涸れぬ葦むらの外そとに

風の向をりふし変る荻むらはたださわさわし眺めに出ても

枯葦が枯葦のかけを落してゐるただそれだけの温ぬくい冬の日

多摩川上流の歌

## 途上

へうへうと心はかろし旅ゆくどけふ春風に吹かれてぞゆく

酒<sup>さか</sup>みづきおのれわすれて昨夜<sup>よべ</sup>はありき今朝<sup>けさ</sup>は菜の葉の風見てぞゆく

青梅街道の春いまだ浅し山椒の魚<sup>ささ</sup>提<sup>さ</sup>げて来る小<sup>ち</sup>さき爺<sup>をぢ</sup>に会ひにけり

早春の菜<sup>なばたけ</sup>畑<sup>け</sup>の風の爽かさよ野中の小<sup>ち</sup>さき駅も見えて来ぬ

枯樗<sup>さか</sup>目にとめていそぐ畑の道は行きつくるなし武蔵野<sup>むさし</sup>に来ぬ

## 桑の曠野

## 国分寺、立川、青梅

吹きさらす曠野あらのの駅に兎をさげてほつつりと待てる命をぢも居り午後

み冬なり曠野の駅に遅れて来る二時過ぎの汽車の煙いま見ゆ

枯桑のほろほろと白く汽車の窓そばの傍走るかにはてしなき見る

枯桑の曠野つつ切つてまつすぐな道がどこまでもどこまでも北へ向つてる

時をり話し為かけてふたたび向く窓まど外そとは白しはてしなき桑

日の暮の枯桑原に火がぼつと燃えて時のま消えぬ赤かりしかも

寒いさむい曠野の中を走つてゆく日の暮の汽車の白い煙だ

この曠野の小さな駅に遅れて来てすぐ発つ汽車のふかき鐘鳴

枯桑の曠野の窪のところどころ煙たてゐてかける村のある

山近く雪まだ残る桑の原の此処らにし見るは廂ふかき家

廂ふかく陽の照るとなき粗壁の枯桑のかげは映るともなき

風雲は気球のごとし冬枯の桑の曠野にただ一つ見ゆ

声高の曠野の人とむかひて坐りひもじき我や燐寸を赤く擦る

ああ名残の夕陽の栄やひとしきりそそぐ枯桑の原の金色の光

雪の山のつつましく近くあらはれ来て桑の枯野も今は未ならむ

雑店ともしびに灯あかくつきにけりはろぼろし桑の枯野越え来し

多摩川上流

鉾杉の春の焦こげいろよろしみと眺め見あかず谿たにそば咀そのぼる

冬山の山ふところの群むら杉は鉾立ててよし寂びし鉾杉

日和ひよりよきけふにもあるかな人居りて山くづすところ爆音ふかし

山裾は枯芝原のひと平家居たひげへゐ竝ならべり日のあたりよみ

多摩川原早瀬はやせにうつる榎つがの木の春浅うして人うぐひ釣る

多摩川原清き川瀬に採る砂のかがやき白しうち響きつつ

多摩川の渡瀬わたせの砂の水を浅み山葵わさび採るべき春ちかつきぬ

春は早や向つ岸边の梅の間まにかすみて紅あかし櫻うづもなるらし

この水のみなもと遠くほのぼのし馬酔木あしびの花も咲きそめぬらむ

春あさき川瀬の崖の老櫳の風烈しけれやしきり光れり

隣り立つ櫳と棕櫚との日のひかり春早き風に冷えみだれつつ

櫳の葉に常しづもらぬ日の光なほさへや風の瀬を越えて吹く

## 杉の谿

この御嶽みたけや春なりながら峯の奥は雪深からし山やま開ひらきまだ

谿たに隈くまは鶺鴒ひはの声多し杉の花のやや秀ほに焦こげて春はるまさに来ぬ

杉谿せまの迫りの深さ時ありて鶺鴒のむれ舞へど雪の山の蔭

斑まだら雪山には凍れ伐りし杉はなまなまと積みてみな棚にせり

岩いは上がみのつめたき竹の秀ほは揺れてまことに冬も末かと思ひぬ

岩いはが根ねの氷柱つららの垂りに映りて通るわれかとも思ふ影のしたしさ

## 山菅

山菅に陽のさしあたるたまたまはかすかにうれしのぼり道なる

谿くまの湿地しめちに生ふる鼬いたち羊齒しだかすかなる陽ひの温ぬくもりにあり

山がはの岩間の湍たぎのひとつところたぎつすなはち凍こごりたるらし

谿岨をいそぐひとりかたまたまはふり仰ぎ見居り真日の小ちさきを

おかめ笹日かげにそよぎところづら日向に枯れぬその間あひ通る

日の闌たけてややいそがしき心ありそここに解とくる氷柱つららの光

吹きさらしの岩ほこらに祠ほこらのごとき廁かはやありて見のさみしさよこころの谿は

## 雪の山道

雪凍る御嶽行者ののぼり坂ごごしとは思へ青き杉の香

鉾杉の鉾の尖りの幾重ね畳はる谿に雪はふりにけり

並み立てる谿の鉾杉白雪つもり見のかうかうと幾秀こもれり

音せしは老杉が上の雪の塊凍雪の道に落ちたるらしき

今落ちし杉の葉の雪はすこし砕け地の凍雪にあざやけく白き

白雪のこごりの塊をひろひ食み我すなほなり母をおもひつ

縦の木の差出の枝の常盤葉のときをり篩ふ雪のかすけさ

雪しろき山畑は愛かなし雑木ざうきのさきちよぼちよぼと出てその実垂れたり

山畑の雪の平たひらに暮がたの青ぞらのいろの吸はれつつぞある

ああ早春雪はだらなる山の尾を電信線は空まで走れり

後あと山やまは雪はだらなる杉の山前山はしろし伐きりし山かも

いただきいの雪にしたしく煙あげて群むる屋根見みゆ御師おしの家かも

御師須崎氏に宿る。

風出でて山やま鳴なりふかき日の暮は遥かに恋し海の汐しほ鳴なり

## 山上の黎明

ひようひようと風吹きとほる山の秀ほは月かげ白し夜明けたらしも

雪ふかき山の尾の上に啼かけく鶏こたの啼かけき応こたふ鶏かけの声のしたしき

## 道のべの春

きさらぎや多摩やまの山やま方かた、まだ寒あかりどき障あかりど子の内、人影あかりどの、手に織あかりどる機あかりどの、ていほろよあかりど箒あかりどう  
つらしき。立ちどまり、うつらに聴あかりどけばからりこよ、桴あかりどの鳴あかりどるらしき。三あかりど杈あかりどの花あかりど咲あかりどき湿あかりど  
る、山の井あかりどよ、下井あかりどの水あかりども滴あかりどるらしき。

## 反歌

障あかりど子あかりどにすずろにひびくあかりど箒あかりどの音あかりど山あかりど辺あかりどの春あかりどはすであかりどに動あかりどきぬ

山かげの懸樋かけひの縁へりの紐水柱ひもつらら 本末もとすゑほそうなりにけるかも

造り酒屋の歌

水きよき多摩のみなかみ、南むく山のなぞへ、老杉の三鉾五鉾とこさ、常寂びて立てらくがもと、  
 古りし世の家居さながら、大うから今も居りけり。西多摩や造酒屋つくりざかやは門かど櫓やぐらいかしく  
 高く、棟さはに倉建て竝なめ、殿づくり、朝日夕日の押し照るや、八隅かがやく。八尺やさかなす  
 桶のここだく、新しぼりしたたる袋、庭広に干しも列つらぬと、咽喉のどぶと太の老いしかけるも、か  
 うかうとうちふる鶏冠とこどか、尾長鳥垂り尾のおごり、七妻ななつまの雌めをし引き連れ、七十羽ななそはの雛ひなを  
 引き具し、春浅く閑しづかなる陽ひに、うち羽ぶき、しじに呼ばひぬ。ゆゆしくもゆかしきかを  
 り、内外うちとにも満ち溢るれば、ここ過ぐと人は仰ぎ見、道行くと人はかへりみ、むらぎもの  
 心もしぬに、踏む足のたどきも知らず、草まくら、旅のありきのたまたまや、我も見ほけ  
 て、見も飽かず眺め入りけり。過ぎがてにいたも酔ひけり。酒の香の世々に幸さいはふ、うま  
 し国うましこの家やぞ、うべも富みたる。

## 反歌

大御代の多摩の酒屋の門かどやぐら 櫓酒の香さびて名も古りにけり

西多摩の山の酒屋の鉾杉は三もと五もと青き鉾杉

## 餅搗きの歌

武蔵野や多摩のみなかみ、御嶽道みたけみち 弘沢ほつさわの口、春浅き日南ひなたのそとに、餅搗くや爺は杵と  
 り、臼のべや婆は手に捏ね、ぼたらことこのどにむか対ひぬ、ぼたらこよゆるにとめぐる。閑しづか  
 なるここのらの里も、雛祭ちかづきぬらし。御形ごぎやう咲き蓬萌えたり。古りぬれど雛もかざれ  
 り。山もあり川もありけり。こもり啼く子ろも居るらし。道みちぼこり埃 しろじろ立てて、吹き  
 過ぐと風はさむけど、雲ゆけば日ざし洩れ来て、おのづからうら安の世や、ぼたらこと爺  
 は杵とり、ぼたらこと婆は捏ねつつ、水凜しみする。

## 反歌

春なれば草の蓬も搗きこめてのどかなるらし餅搗もちひつきををる

道のべののどの餅搗きおもしろと見つつあかずも杵の手ぶりを

めぐり見つつあかずも搗くたびに杵にのり来る餅のふくらみ

搗きたての餅もちひならずとしろき粉の米の粉まぶし手にたたきをる

S

山道にかかる

しろじろと埃あげくる道の風やや片かたよ避けて旅ごころあり

人も見えね御嶽みたけさんだう山道の風かざほこり埃目めにたちてしろき午ひるす過ぎにけり

印旛沼吟行集

五月中旬、千葉県人会よりの帰途、千葉より印旛沼の吉植宅にゆく。

この己は鱒になりぬ天然更新の君は鯰になるならよしも 夕暮へ

うれしくておれは鱒を踊るなりこれは大きい印旛沼の鱒 牧水へ

両国の一ぜんめし屋でわかれたるそのち恋し伯林の茂吉 茂吉へ 二首

ざるふりてすくふお前がうれしくておれは鱒になりにつけるかも

おもしろとうれしうれしと尻ふりておれが踊ればほめられにけり

初夏の印旛沼

印旛沼展望

下総や印旛いにはの大沼見おほぬにと来て見ておどろきぬ灰濁はいだめる波

はろばろし葦原かけて湛ふれば空よりも明し大き 印旛沼いんばぬま

草食むと赤馬放れるる土手越しに一面に明るあれが印旛沼

印旛沼の屯の楊ゆたかなれや息長の風に垂れて靡かふ

印旛びと出水かしこみはろぼろし葦原かけて植ゑし楊彼れ

印旛沼家居とぼしき沼尻にも老木の楊絮深みつつ

印旛びと印旛の津々に屯して魚とり葦刈りにしへ思はむ

友が家は沼尻のいづこ目も遥に葦野つづけり河楊も見ゆ

註・葦野（アシヤ）はその地の俗語である

千櫓と歩む

二人は遅れて行つた。久しぶりで汽車の中から飲んだ。この辺では四合瓶一本と大きな白い盃を二つ持つてゐた。黴いので大切に飲んだ。

日の照りて茅花つばなそよめく浅茅原我等あぐらる冷きひや酒のむ

風あそぶ土手の蓬生たわたわに愛かなし女かなびきこもらふ

蓬生たにいとど沁み照る酒の滴たり惜しみ愛かなしみ飲みてゐるかも

酒を惜しみ春を惜しむと印旛沼や土手の長手をあかず飲み行く

印旛沼津々の萩原風ふけば見ゆるかぎり皆そよぐなり  
いんばぬま

枯葦にとまるすなはち揺れ揺れてよしきりが鳴けり若葦の原に

この友と酒をふふめばねもごろに見つつよかりしあの頃おもほゆ

事繁み常し離ればまれまれものどにはあはず君とのまずも  
しげ さか

酒飲みてまことよろしといふひととまことよろしくのむがうれしさ

菱の花菱の実となるあはれさも早やただよへり舟にて見れば

朝刈の戻りなるらし草負ひて渡し舟待つ姉と弟

南風みなみよし葦と水田の中道は葎切も鳴けば蛙も鳴くもよ

昼餐

ねもごろの印旛びとかも白の馬木につなぐとし一まはりすも

白馬しろつなぐ君がお庭の陽の影は百日紅の老木おいきの若葉

昼ながらこの幽けさは印旛沼の湛への澄みの響かふならむ

一つゐる葎切のこゑはすがすがし広間とほ徹りて家裏やうらに響けり

しみじみと酒を控へて涼しきはこの大きな家いへの葦原はえの映

大きな家の外の日の照りあはれなりかけろ鶏遊ちべり小さくうごきて

印旛沼の出水ふせぐと臨終<sup>いまは</sup>まで畏<sup>かしこ</sup>みし人のよかりける酒 庄亮氏の祖父君のこと

印旛沼の出津<sup>でづ</sup>の若葦さやさやに響つたへて為すありにけり 庄亮氏に

蓮うゑて楽しまむよとほのぼのと酒のみていふ<sup>こと</sup>言のよろしき

印旛沼の大きたたたとさながらに常を湛へつ上おほらかに

やさし妻ころも更へつつすがと笑ます君かも髪に手をあてて

舟に乗る

あさみどり葦間の小田の下<sup>したもえ</sup>萌に蛙鳴きたつ霧<sup>さめ</sup>雨の前

時ぐもり印旛落しを榜こぎ出でて幾いくら時ならぬに明るさぎなみ

時ぐもり下しもの水路の日たむろの楊の揺れもすぐかけるなり

ついそこの枯葦束の裏に来て日和よろしく葭切鳴くも

ふと見てし水のほとりの湿り花なでしこは紅あかし見つつ榜こぎある

印旛沼狭き水曲の水の手の若葦の伸びの丈たけのさやけさ

楊と絮と鯉網

印旛沼いんぱぬまの堤やなぎの楊やなぎ老いにけり上げつばなしの四つ手網の上

夏なつごとに出水に水漬みづく河かは楊やなぎの絮わた白うして老いにけるかも

とのぐもり老木おいきの楊影落す水面みのもあか明りを飛べる絮あり

ねもごろに老木の楊絮つけておのづから離し立ちしづの閑けさ

楊より楊の絮が離れてをり穏かならし今日の曇りも

風たちぬ沼の隈回くまみの日たむろは楊の絮の飛びよきところ

元棹に早や結ゆひつけて張る網の縁水へりみづ漬きゆく河かはやなぎ楊のかけ

垂りふかき河かはやなぎ楊の根のそよそよ風鯉捕る網はすばしこく張る

鯉ひそむ河かはやなぎ楊の根の底明りがぼがぼと棹に搔きみだしたれ

鯉ひそむ張りのしまりを引き引きて網たぐる手に水はねあがる

印旛沼ぬの金鱗こんりんの鯉みじろがず夕風の網に捕られたりけり

早やゆふべ水滴たり落つる網の目に赤き蟹が一つひつかかりてゐる

印旛びと鯉網は張れ鯉の巢に日にし重ねかしくず畏み帰る

### 萩と莎草

数百町歩の萩と莎草と葦の原である。

莎草くぐの原昼もかなしと母が目を離れかつつこもる夏ぞ来向ふ

朝草は朝に刈り干し夕草は夕べに刈り入れすべな会ひけり

出津の夏いよよ深むか萩の葉の萩臭くしてすべし知らぬを

浅宵のかやつり草に似て大き莎草ちふ草を藉きて寝るなり

萩がくり莎草も苔めど大き手の男どち来て酒を惜しめり

ほのぼのと莎草の花さく萩むらは残暑の照りに後刈りぬべし

早や涼し葦原行けばしら玉の露上りをり秀にも縁にも

母馬仔馬

友が家は小米ぎくらのこぼれ花けふあはれなり仔馬跳ねあて

この出津の葦谷あしやの照りにゐる馬は涼しかるらむ子を遊ばせて

仔の馬も前の荻生の日の照りに涼かぜ食ふと出て馴れにけり

此方向こなたく仔馬は愛かなし母馬の莎草食む傍そばゆ眼をあげてゐて

春生れし仔馬はいまだ乳のみて遊ぶのみなり螢草の花

仔の馬の露けきまみに飛ぶ蠓子ぶよのまつはりしげし夕づきにけり

若荻原夕風吹けばあはれなり仔馬はかへる母に添ひつつ

馬柵ませ越しに小米まぜぎくらの花見て居る仔馬の頤に薄き髭あり

葦間の明暗

葦むらに舟とめて久し湿り風ソフトにも感じ水透かしをる

水の上の影はすべなし菅は菅葦は葦としさやかにかがよふ

すべはなし水面に映る葦茎の太きは太き細きは細き

かの水の明るき面にふと映る葉の影は抽けて揺れし菰の葉

明らかに水漬く根方の葦茎は突き入るごとし影に折れつつ

葦茎のうぶの柔毛のいみじさよ水づくその毛はつけぬ白玉

陽の映えてまたあかあかとすべなきは穂のちぎれたるばんばらの葦

## 鳩

印旛沼の水照りのかすみ夕まけて湿らむとすらし鳩の鳴き出でぬ

印旛沼日の春けば鳩のこゑこちこちに明る遠の靄より

水鳥の鳩の浮巢のさだめなさ水量まされば辺にと浮きつつ

夕沼のこちこちに浮く鳩の子は一羽は浮かず連れつつぞ鳴く

津の間の広き水路にぼつぼつと出て見て消ゆる暮の鳩なれ

傍ぎかへる舟のあとべに浮く鳩の尻ごゑは長く水にひびけり

ほのぼのと鳩の浮巢も湿るらむついたちの月の入るさの闇は

## 夜食

印旛沼ぬの金鱗こんりんの鯉みじろがず諦あきらめ果らてし姿思もひ食くふ

昼捕りし鯉の洗ひの水紅にんにくは大蒜磨りて浅夜食あさよたぶべし

印旛沼の真夜のあやしき小つぶ雨鯉鮒ふどもが光りつつあらむ

## 印旛の葦

## 印旛囃子

夜宴は農人たちの印旛囃子から始まった。その讃唱歌。

印旛びと印旛囃子を葦原やよしきりが族ぞうにいにしへ習ひし

印旛びと津々の葦間にたむろしてこそり葦刈り囃す歌これ

産土うぶすなの印旛の歌よおのづから萩吹く風のさやぎしこもれり

大沼のここの印旛いにはの葦の芽のさやさやし囃子ききにけるかも

常生くと朝魚夕菜あさなゆふなに印旛びと今も暇なく網と鎌もち

朝の出がけに出て山見れば雲のかからぬ山はない

筑波根に朝る夕るる旗雲とよの豊あけの紅見て出ては刈るらむ

背せは魚なをとり妹は萩刈りよろしかもなしのさながら今も為しけり

いにしへの印旛の神が為し会あひの蘆谷のこもり今も為るかも

よく遊ぶ印旛びとかも鉦うちて遊ぶみぎりほは恍惚し顔せり

寒の鯉水にしめつつかつぐ子も夏は浅夜の鉦たたきけり

### 里神楽

農人たちの群の中から、紅い手拭の頬かぶりにひよつとこ面、派手な友禅模様の短い衣裳をつけて踊り出したものがある。里神楽の囃子が起つた。

畚ふしに盛り山をかつぐといにしへは笑ひぞめきぬ神楽囃子に

里神楽笑ゑらぎ浮かるとよく跳ぬる毛脛もとの本を見らく愛かなしも

こを見よ笑へ笑へとをどりをり笑へざりけりひたぶるなるは

おもしろくなつて、今度はこちらも飛び出した。なかなかうまいをどりである。

踊るとて早もうれしくなりにけり頤に吾が結ふ手拭の紅

くれなるの里の手ぬぐひうれしくて頬にかぶるきはよ何も思はず

面<sup>めん</sup>つけて豆の二つの眼の孔ゆ細く透かせば人小さくある

こはわるしかはつたなしと常云ふは遊ぶ心を常もたぬらし 尾山に戯れて 二首

酒のみて恍れて遊ぶを酒のまず恍れず遊ばぬ蒼き顔せり

このをどる面<sup>めん</sup>のうらべよ痕つけて涙しじなり誰ししらずも

ようをどるおのれ愛<sup>かな</sup>しも笛つづみあやに囃せばいよいよ愛しも

麦搗踊

麦搗踊がまた始まつた。千櫛君と私とが飛び入りにまた踊り出した。

世の中は常しさびしよ麦ほこり浅夜立てつつ搗きてめぐらむ

すべもなく常なかる世に鉦つづみ振りて鳴らして遊ぶ子らはも

おもしろと手うちはやしてはや立ちていつかをどるとをどりるにけり

おもしろの印旛いにはびとかも夜をこめて教へたぶなり麦を搗く型

杵はかく持て麦はかく搗け然見せつえやとをどりつ連れてつきつつ

やと下ろす杵の手ぶりのおもしろさえやととめぐる麦搗きをどり

麦を搗くをどりをかしとおもしろと手振りをどれど足取はまだ

えやおもしろそやおもしろとをどりをりこれの浅夜の麦搗きのとも

麦搗くと搗きてをどりてすべなけどをどりあかさむ鶏の啼くまで

杵とりて麦は搗かねど麦搗くとつれてをどれば香に酔ひにけり

なみなみと酒は注がしめややさめぬをどりをどりて吾は草臥れぬ

これの輪の小夜のをどりの身につきていよよろしくなりてくるかも

ほのぼのと歌ひをさめてをどりの輪あはれとめたり鶏の啼くとき

## その後

踊りはてて残り酒すふ口あたり末苦うして臍<sup>へそ</sup>辺寒しも

寝かされてふすまかぶりて夜のほどろ手だしをどらせ叱られてゐる

踊はててさがる厨に里びとがいただく酒はまたうまからむ

## 黎明

この里の麦搗きをどり夜の明けは早や憂かりけりよしきり鳴きゐる

あなかしこ童<sup>ご</sup>ごころもつゆなくて童さびしつ許されぬかも

## 信濃高原の歌

大正十二年四月、妻子を伴ひ、信濃小県郡の大屋に義弟山本鼎の経営に成る農民美術研究所に臨む。旁々七久里の別所、或は追分沓掛等に淹留、碓氷を越えて下る。

## 落葉松林の中に

別所より追分へ、追分より沓掛へ、その落葉松林より落葉松林の中へ、淹留すること半月。

落葉松林に添ひて

浅間嶺ねの麓高原から松の林は黒しはるく春来ともなし

うち霧きらし浅間はわかず雨雲の弥いやしき垂るるすぐろ落葉松からまつ

小諸過ぎ御代田みよだに來ればすぐと黒きから松の原が遥はろにつづけり

夕せまる落葉松山にすぐろ木の高木は寒し目に久に在り

落葉松からまつの溪間たにまの窪は刈かりぐひ株ひの白う褪せたる乾田ひだの菱ひしあぜ畦

春浅き落葉松溪の線路ぎは哩標の白き杭がまた在り

霧雨の田中に囲ふ菰櫓いまだも寒し氷採りつつ

から松の夕深溪ゆふふかたにの溪かけて汽車うねり出づる白き湯けぶり

溪かけてうねりふくらむ汽車の腹のぞきゐる頬に煤吹きあがる

末黒の落葉松材の夕溪ゆふたにのなだり伐り下ろしほうり出し積む

夕かげの線路のさきに丸太木積み仮駅ならしややに明り来

から松の溪間の駅に今日から停まり汽罐かま鳴らす汽車よここは追分

この溪に汽車見に來り夕遊ぶ子等が騒ぎも雨ならむとす

から松の溪間のぼると子を連れてから松の原をかへり見つ我は

追分の油屋まで

この山は落葉松からまつつづきから松に白かんばまじり霧きりこさめ小雨あり

夕せまる落葉松原のこぬか雨傘さして妻に子を負はせをる

から松は繁しみみすぐろしすぐろけど早や春来らし芽立しめ湿れり

霧雨の落葉松原の白かんばまだすがれつつ白う光れる

から松の林の道はから松積み二輪馬車がとほるそれだけの道

新芽<sup>にいめ</sup>張るから松苗はいち早し春雨とめて千露<sup>ちつゆ</sup>むすべり

この雨や芽立の萌黄かをすかにから松の原を行けば湿<sup>しめ</sup>り来<sup>く</sup>

から松の芽立の林見にと来しまだすぐろ木の雨にぬれつつ

白樺は幹は白けどほそり木のこずゑ<sup>あけ</sup>の紅に雨も保てり

雨後の夕

夕明るこの雨あとを出て見るとから松の靄に向ひて歩めり

このゆふべ傘たたみもちて見てゆくは雨あとの橋のてすりの光

雨とめてゆふべあかるき浅芝のへりかぢりゆく曳かれ山羊はも

たれこめてきけるかはづをゆふべ出てこゑの明るくきくがうれしさ

このあたり、から松の細枝を編みて垣とす、風致雅なり。

この門の夕明るみはから松の垣根ならしとほめて見にけり

落葉松原茜さしそふ雨霏なの和ぎしめらへり出でてながめむ

### 細雨の朝

雨の玉とめてあかるき真ま木の枝えに紫あさく春は来向ふ

田しばの芝しばにぬか雨むすぶ蜘蛛あの糸みのかがよふ見れば春は来にけり

春あさきこの溜池の芽生藻めばえもに鯉の卵はとどはずまだ

芹青む小田の田べりのちよろろ水けさ見に来れば畦あぜを越えつつ

この背戸は桑の根さむし姫笹の枯れし艶つやのみ雨に明れり

追分の小田の窪田の初蛙こゑのをさなにふふみそめつつ

雨にこもれる

この雨にをさなかはずも鳴きつぐとこゑとどのひぬ二日三日して

今朝の田に雨よぶかはづをさなけどころろと鳴けば春田めかしも

雨しげし下田の根芹つみに出て濡れゐる媼をばかあの頬かむり

畑つものいまだ乏しか炬燵して芹のひたしを今朝もすすめぬ

あぶらうく鯉の味噌汁味噌くさし芹を醬油したぢにひたし食たべたり

靄しげき山の田見れば小舟ゆく潮来いたこの沼の沖田おもほゆ

山かげの田を鋤く人は馬持たず高き犁すきもてのびあがり鋤く

家裏ひとぎの一木から松ふる雨のぬか雨ながらしとど霧へり

雨の間は急せき鳴く蛙しきりなり早や夕づきし障子にひびけり

雨なりしきのふをあれの八ヶ嶽雪やつつもりけらし今朝白う見ゆ

## 追分の宿

追分は脇本陣のむら青の蛇腹の獅子の眼眸まみも老いたり

軒並は旅籠の名のみゆゆしくてこの追分の宿しゆくも荒れたり

夕光ゆふかげにがた馬車駆るはあはただし小林区署の人にあらずか

春だ春だ木小屋の羽目にぶらついてゐる山火事警戒の赤いポスタア

春の日も古き駅うまやの山羊の子は鈴ももたずて夕帰るなり

から松の夕かげおよぶ破れやびさし石ここだのせていまだしめれり

浅間嶺の野分おそると屋根低く葺き竝べけむから松の原に

屋根低く窓ひとつなき側面に夕日いつぱいにあたる冬なり

仮宿<sup>かりやど</sup>を落葉松原にはいり来て落葉松つづき御代田へぞゆく

桑の根に枯れて光らぬ薄の穂根刈りすべくは春雨ののち

追分は夕光<sup>ゆうかげ</sup>の間を戸<sup>ま</sup>を閉<sup>さ</sup>して本陣のまへに寝る犬<sup>あ</sup>が露<sup>ら</sup>は

あきらかに春とし思<sup>も</sup>へど夕照のから松<sup>う</sup>の梢<sup>れ</sup>が黒くそよげり

二十三日、山本夫妻、沓掛よりガタ馬車に揺られて来る。夕刻、うちつれて追分の岐れ道を見、惆悵として帰る。

馬子ぶしの古き追分夕陽さしぺんぺん草の二三本の花

追分の辻の浅芝斑萌むらもえて伸びしはしより山羊に食まれつ

追分の辻に出て見て簡素なり馬頭観音の四月の夕陽

馬頭観世音の裏の夕陽に出でてふたりみたり二人三人さびし鴉見やりつ

うつせみの仮宿過ぎて追分の道の二手ふたてになるがはかなさ

春浅き大名行列ここ過ぎて江戸は近しといそぎけらしも

この松は松笠多し枯なむと夕陽あかきに歩みとどめつ

### 放牧の絵馬

信州小県郡別所温泉（古名七久里の湯）北向観世音の絵馬を観て詠める歌七十首。絵馬には独立ちの馬を画けるもの、或は二頭立ちのものあれども、その中に特に異彩を放てるは大額一面に数百となき放牧の馬を画けるものならん。その全額面は、ただ僅かに地平に青空を残すのみにて、凡ては群馬を以て満さる。芸術品としてはさしたるものにあらざるべきもまことに信濃の風土色を現はしておもしろし。これらの歌は主として大額の絵馬の記憶について歌へり。但し、表現の上に於て、その全体の或は個々の神を伝へんとするに必ずしもその形態の写生に執せず。半ば以上は予が平生の「馬」そのものに於ける観照と、連想の自由にまかせたり。故にこれらは精神に於て新に予自身の絵馬として創

作されたりと為す方当れり。ただかの絵馬は予に此の機会を些か暗示したるに過ぎず。

### 序歌

観音の春ののどかに詣でゐて我愁ふなしまかせまつりつ

我がこころ今は寛<sup>ゆた</sup>けしかもかくも春ののどかに遊び足りつつ

旅に来て今はた安しむらぎもの心放ちて遊びてをれば

この旅は妻と子を率<sup>あ</sup>ついとまなき旅ならずけり遊ぶとて来つ

旅ごころ今日うら安し子を抱きて絵馬のかずかず眺めまはりつ

絵馬師

七久里ななくりのこの観音の絵馬堂に献ぐる絵馬はみな牧の馬

青雲のそぎへのかぎり遊べよと絵馬師心あれや馬放ち遊ぶ

信濃の山の真洞まほらに晴れて放ち心ゆく筆や馬描き満たす

馬は描け轡手綱のいましめは描かず放ちぬよき絵馬師かも

野に遊ぶ馬は描きつつ自しが遊ぶ絵馬師が心しぬび泣きたり

群なす馬描き放つ勢きほひさもあらばあれ幽けき馬は堪へて描きけむ

馬の顔馬の顔してゐたりけれ萱やすすきを吹く風の中うち

ねんねんに絵馬師が描ける愛かなし馬一つとしておなじ顔は無しもよ

馬主

奉納の絵馬の青駒よき馬によき名しるせり佐久の馬主

佐久びとはゆたかなるかも自しが馬しに自しが氏名うじなしるし絵馬奉る

ひたむきの馬ぬしかもや観音と云へば馬頭観音のほか御名しらぬなり

馬市にむらがる馬は数しあらめ自しが馬しよしと牽きむけ我背

雲のごと市にむらがるいななきは北佐久の馬ちひさがた 小 県 の馬

野に放ち肥こやせし馬ぞこれ見よと汝なえ兄が青駒ほこらくは今ぞ

群馬

野をうづみ馬のかぎりが遊ぶ絵馬眺めあかずよ子にも見せつつ

牧の野に馬のかぎりが食み足りて遊べる絵馬を見るがゆたけさ

この絵馬の馬のかぎりが食み足りて遊べる牧は北佐久の牧

みすずかる信濃の駒は鈴蘭の花さく牧に放たれにけり

青雲にきほひいななき牧の馬の応こたへとよもす秋は今来ぬ

信濃の山の真洞まほらに解き放たれいなく馬は秋風の馬

青馬あせむるる牧のはたての秋山は金泥の霧にへだたりにけり

空ぎはに離りさかて遊ぶ白き尾のかすけき馬は雲にとどけり

息長おきなの野分のわきの息吹いぶき遠空きやうに兆きざせども明あかしこの牧はまだ

野分のわき来るや馬城うまぎの茅萱かや吹きなびけ風かぜ並なみしるし吹きちかづきぬ

胸高に風かぜにいななく牧の馬やいとど白しろきは遠とほ駆ける馬

薄吹く風かぜにいななく青駒あおこまは力の張はりや外とに急燥はやるらし

前搔き搔きはやり堪へる赤駒の尻尾の垂りに力こもれり

跳ね立ちて今飛ばむずる雄の馬の後あとあし脚の据わりゆゆしかるかも

をどり立ちたけ猛りおどろく赤駒のたてがみの振りに野分来れり

驚破すはと振る駒が尻尾の一と跳はねを描きとめて荒しこれの一筆

牧馬のきほへる中にゆゆしきは脚そろへ立つ大黒の馬

黒駒はゆゆしかしこし北佐久や野分しき吹けさゆるぎもせず

連銭の葦毛がむるるひとたむろ 白びやくこう虹ささせり犬蓼の花

寂しくもつくばふ馬かたまたまは首向けて見居りおのが尾の振り

この牧の深風<sup>ふかかぜ</sup>凧<sup>なぎ</sup>に息澄みて前脚折る馬は大鹿毛の駒

日のさかり坐りゆたけき大鹿毛のねむりは深し萱むらのまへ

身もたまもをどりゆるがせ仔の馬の遊べる見れば心ゆらぐを

蹴り蹴合ふ仔馬は愛<sup>かな</sup>し逃ぐるとし黄の月見草かろく飛び越す

秋風の黒の母駒仔を守ると目もはなたねば瘦せにけるかも

母馬は仔<sup>こ</sup>にはやさしけ仇ふせぐ構への張りは隙見せずけり

母が目を離れつつ遠し仔の馬は薄のあかき穂にかくれけり

風光る川はわたらず鹿毛の仔の小さきは戻る水のそばより

水のむと夕うなかぶし鹿毛の駒まだあはれなり眼をひらきつつ

まさびしく噓<sup>はなひ</sup>る馬はたがらしの花にか触れし首はうづめぬ

風向ふ群の茸毛のたてがみはそろひて黒し揺れなびきつつ

青の瀬にをどり越ゆとし青の瀬に鹿毛の若駒いななきにけり

揺りおよぐ鹿毛の尻毛の垂り重くたぶたぶと沈み白き渦波

垂り重く尻尾沈めて青<sup>さを</sup>の瀬に前搔く馬は月じろの馬

前脚<sup>まへ</sup>かけて岸にをどると急<sup>せ</sup>く駒の尻毛がさばく渦の水玉

たじたじと後<sup>あとしげ</sup>退りつつこの馬や尾の根据<sup>もと</sup>ゑたり光る風の下<sup>しも</sup>

ものの蔓<sup>つた</sup>引きさぐる馬の長ら顔ゆふべはあかし陽に照られをる

朴の辺に日かげ求めつつ目のうすき月毛は疎<sup>うと</sup>し老いにけるかも

駈<sup>か</sup>け駒はうしろ振り向くたまゆらも尻毛平になびかせにけり

駈<sup>か</sup>け駒は四つの膝瘤<sup>ひざこぶ</sup>力こもり蹄<sup>ひづり</sup>の裏し空向けつ皆

駈<sup>か</sup>け駒は勢<sup>いきほ</sup>ひ空飛べ閑<sup>しづ</sup>かなる駈<sup>か</sup>けのとまりはひたと停<sup>とま</sup>りぬ

目も遥<sup>はろ</sup>に野分吹きしくすすき原見わたして小さし丘に立つ馬

近き馬は太くゆたけく遠き馬は小さく描きたり幽かなる群

誰知らぬ深萱むらにかくれるる鈍にびぐろ黒の馬も或はあるべし

薄より赤き顔だけ突きいだし馬あはれなり秋風ぞ吹く

この馬は吹きぬき風に草食みて耳ひとつだに動かさずあり

汗あゆる鹿毛の平頸ひらくび浅間嶺の山肌のごとき光くわうたく沢たくにあり

荻をぎすすき馬は馬づれこもらへば馬くさくして寄りがたからむ

空見ると老馬のまなこ大きけどしばしば閉ぢて目やにたまれり

水のむと白と黒とがうなかぶし白かがやけりこなたへの馬

すがし眼<sup>め</sup>を夕<sup>ゆう</sup>近づけて対<sup>むか</sup>ひ合<sup>あ</sup>ふ黒<sup>くろ</sup>馬<sup>ば</sup>と黒<sup>くろ</sup>馬<sup>ば</sup>とに月<sup>つき</sup>明<sup>あ</sup>りあり

絵馬ながら馬はさびしよ白は白黒は黒とし遊<sup>あそ</sup>ぶほか無<sup>な</sup>き

風の萱<sup>あや</sup>行き遇<sup>あ</sup>ひ馬のたてがみは逆<sup>さか</sup>さなびけり驚<sup>おど</sup>きにけり

### 春駒

春駒や背<sup>せ</sup>に結<sup>ゆ</sup>ふ手綱<sup>てな</sup>ゆたゆたに垂<sup>た</sup>りてたるめり奉<sup>ほう</sup>納<sup>な</sup>の絵馬

おほどかに額<sup>かぶ</sup>いっばいにゑがかれて群<sup>ぐん</sup>青<sup>せい</sup>剥<sup>は</sup>げし独<sup>ど</sup>立<sup>た</sup>ちの馬

観音のこの大前に奉<sup>ほう</sup>る絵馬は信濃の春風の駒

をはりに

子よ吾子よ馬はもたずも赤駒の木馬きうまや買はむ大き揺り馬

七久里の露

四月中旬、妻子を率て、信州別所温泉、古名七久里の湯に遊ぶ。滞在数日。宿所たる柏屋本店は北向観音堂に隣接す。楼上より築地見え、境内見ゆ。遠くまで一望の平野みゆ。幽寂にしてよし。

観音の暁色

湯どころの春のねぎめのおもしろさ鐘と太鼓の互み鳴りつつ

観音の太鼓とどろく夜のほどろ下田はるかに啼く蛙あり

観音の春はあけぼの紫の蕙の反りの隅すずみの鐸

遠べにも観音さまの反り蕙早う眺めて起きる子もあらむ

ふるさとは清水観音の雉子車を思ひて 一首

父恋し母恋してふ子の雉子は赤と青もて染められにけり

春暁

別所に男神女神の両嶽あり。その御手洗の末合して相染川となる。

八重雲の豊の紅あけぐも雲このあした女男の神嶽巻き立ちあがる

雲分きて男神は明くれほのぼのと女神はいまだ紅あけにこもれり

御手洗みたらしや相染川の両岸もろぎしに對ひて明る連翹の花

ほのぼのと相染川の水越えて連翹の花に遊ぶ風あり

溝鼠みぞねずみほのぼの籠めて霧ふかき黄の連翹の夜も明けむとす

## 春朝浴泉

起きぬけに新湯あらゆにひたり恙なし両手張りのべ息深うをり

ほのかをる硫黄のこもりよろしよと今朝安らなり湯にこもりつつ

ふくらかに空気こもらふ白タオル固うむすびて湯をよろこべり

浴泉のこの安けさに射しこもる朝かけ紅あかし顔を洗ひつ

ごむの毬湯には浮かしてあそぶ子とあかき日光ひかけをよろこびにけり

をさなかるいのちゆるがせ遊ぶ子の蹠見あなうられば愛し紅あけせり

つくづくと身をいとほしむもどごころ湯にひたりつつ繁しじにゆすり来

観音の春昼

観音の金鼓こんくひびけり湯に居りてのどかよと思ふ耳あらひつつ

鰐口の音ゆらぐもよ子を連れて或は妻か詣でたらしも

観音の金鼓揺りつつ子にとらす黄と赤の緒のねぢり緒のたま

観音の平鐘かねの緒長くこきたれしながき春日も暮れはてにけり

湯の町 春昼散策の一

春昼、宿の若主人の案内にて散策す。同君はカメラ党なり。

護摩たくと築地ついちの照りに映り来る人かげ見れば日も闌たけたらむ

七久里のみ湯の湯川は橋竝に蒲団干したり春の日をよみ

裏透きて家内やぬちあをきはかへるでの陽の映りらし燕あるこゑ

早鐘うちすぐうちやめぬ春もやや山火事うとくなりにたるらし

安楽寺 春昼散策の二

日のあたる築地のもとに絮わたふかき御形が咲きてうれしき御寺

萱ふかき御堂は框かまち光らずて障子いつぱいの閑しづけき光

おとなひて待つ間まは久し檐のきいた板の影みぎりは砌もとの外に移りぬ

寺庭の春の日向の閑けさよ山杉の風まれに音して

寺の子は日蔭の砌つたひ飛び素足さみしか眩まぶし目をせり

老松少し。伝肇寺を思ひて 一首

吾が寺は豊かなるかも春かけて山松の風さはに音しつ

独活畑 春昼散策の三

朝にけに芽独活かなしと盛<sup>もり</sup>高<sup>だか</sup>にかけつる土を今日は掻き掘る

山びとは春もふけぬと棚畑の芽独活かきほりのどにかがめる

独活の芽のかなしき紅<sup>あけ</sup>がふふみたるこまごまし土はいまだ払はず

いや遠き昼の山火はのどのどと見もかすむらし芽独活ほりつつ

山畑にあれの独活ほるうしろでは君がカメラに撮<sup>と</sup>るべかりけり

独活畑に莨吸ひをるあのがた春はのどかによ<sup>う</sup>撮<sup>つ</sup>しませ

常楽寺 春昼散策の四

薄東たかだかと積む御堂横日はあたりつついささか寒し

木蘭<sup>もくれん</sup>は寺の日向にあかるくて木ぶりかそけき紫のはな

木蘭の花のかたちは帰依びとが掌<sup>て</sup>をあはせつつかそけきがごと

葎<sup>へた</sup>ばかり枝にはつけて日のあたる豆柿ならしここだくの葎

干葡萄酒にひたしつつこはよしと仰向きて食めば人が撮しつ

野の宮の二つ幟がこもごもに照りつかげりつ春はのどかさ

柴木たく野山ならしとながめりて煙しき湧けばのどならぬかも

春夕散策

向畑に榛はりの花かと思ゆる房ほたたと赤し出でて見んとす

高畑の柿の老木の下通さくらはあかくふふみそめにし

観音の矢場の日永にきそふ矢の的矢はおほく当らざりけり

路に西行の戻り橋あり。往昔、西行上人此地を過ぎ、畑の麦を見、村童を顧みて何の草ぞと戯れたまひしに、童すなはち冬莖立の夏枯草とし答へたりければ、何思ひたまひけむ、そのまま元来し道に歩み返したまひにけり。その名ここより出づと云ふ。

夏は枯れ冬は茎立つ草の穂のいまだは伸びね逢はむ子もがも

夕明る橋の上へ来つつ女め童わらへや甘菜吸ひほけ円まき眼をせり

往還に出づ。余五將軍維茂の塚あり。

春は早や維これもちづか茂塚の草塚のふくらにあをし萌えそめにけり

道を出てやや歩ますと子が手とり夕うらさびし旅に来てゐる

ほれほれ馬が来くるぞと片よ避けて子とかがみをりそのとほる間を

露茎の七久里漬を売る子ろに声かけてとほる馬子の足どり

往還の積木に下ろす子の重さ腰かけてわれも遠田見てゐつ

春山の下田の畔あぜに来る鳶はおどろきやすし翼つばさ伸し立つ

観音の蓑ながめて帰るころ早や夕明る田螺たにしがころころ

このあたり鎮守の祭らし。

葱坊主夕づく遅し晴衣着はれぎて戻れる子等はいまだ外とにあり

### 氷沢行

別所の裏山づたひに半里余をのぼれば氷沢にいたる。山高く、夏は三伏の盛夏

と雖も冰雪ありと云ふ。ここに風穴を穿ち、蚕卵紙を貯蔵す。予がのぼりし陽春の候にも冷風絶えず。風穴の水柱また深く、山椒の魚生れ、名知らぬ高山植物の花むれ咲きたり。この行、妻と伴なり。なほ湯川は一名相染川と称す。この温泉町を貫通する小流なり。石湯はその名の湯なり。岩石の湯床を以て名あり。

## 一

七ななくり久里や石湯いはゆへかよふ仮橋のかかりの上のしだり山吹

七久里のにはほふ湯川は山吹の一重の花ににぎはひにけり

この道はよろし山道吾が好きな山吹咲きてよろし山道

二

山ゆけば落畑多し落の葉の畑にあまるは路へ萌え出ぬ

七久里は落の名どころ窪畑の落のかぎりが臺に立ちつつ

出はづれて山路へかかる日おもての棚畑の落は大き葉の落

三

猫やなぎ咲きほほけたる山路につき自由画持ちてとよみゆく子等

学童らクレオンで写生してゐしが雲浅き山へいつか消えたり

## 四

山畑にいくつ燃す火のすゑなびきこもごも白し春たけにつつ

山畑や赤き埃ごみび火の風脇かざわきにかがめる人もものどにかすみつ

## 五

雲あかる山の真洞まほらに啼くこゑは丹にの頬ほの子雉こきぎす子早や巢立つらし

雉きぎす子啼く蔭山なだりこもごもに茅萱萌えたり丹つつじはまだ

## 六

山の井にさびしく髪はかいなでて子を思ふ妻か今はいそがな

山の井の下井にひたす 早蕨さわらびは根にそろへたり 笹を吊るして

早蕨にしこげの柔毛の渦の渦巻は萌えづる ただち巻きにけらしも

## 七

浅芝ゆきげや雪解のにじみ道越えてまだひえびえしは だら光れり

ひようとして寒き風来る山はなに上衣うはぎいそぎ着けぬ 氷沢かも

## 八

苔水に山椒の魚はうまれるてまだこまごまし 日光ひかげいとへり

山椒の魚いまだちひさし追ひつめて杉の落葉のあかき掬ひぬ

岩清水堰き層みたる杉の葉の下べ紅せり水漬かぬはまだ

## 九

高山やここには白きすがし花雪間の枯れに群れてふふめり

岩が根の斑雪はだれにほふ紫は名しらぬ花の数群るるなり

雪のべにほひはふふむ群花の春のいとなみ深からむとす

むら燃えの朱あけの櫛しどみ子を見て過ぐと下りは急きぬ小石蹴りつつ

## 十

山里は桑の葉肥ゆる陽の青を遥けく春や残すならしも

雪かよふ山の榛生に晴衣着て遊べる子ろがひとり笑へる

花盛る山の榛生の裏かけてしきり飛び啼くは四十雀らし

草刈のもどりならし

声はすれ向ふ岨ゆく子等がかげ山松が間をまだ出はづれず

農民美術の歌

大正十二年四月、信州小県郡の大屋村に農民美術研究所が開かれた。

### 鐘が鳴る

鐘が鳴る丘の研究所の鐘が鳴る雪が消えたよ春が来たよと鐘が鳴る鳴る

もうすぐだ農民美術の展覧会だ信濃の春も目に見えて来た

これからまた春蚕はるごの支度だ桑つみだ研究所は閉鎖しやくたちよとお別れだ

### 開所式と丘の上の宴会

シルクハットの県知事さんが出て見てる天幕テントの外そとの遠いアルプス

うちの子があかい林檎をにぎつてゐるシルクハット抱いたほら笑つてゐる

あの光るのは千曲川ですと指さした山高帽の野菜くさい手

輝く果実とその影とだ盛つたばかりだ楊の籠には竹のナイフだ

いま注いだ麦酒のコップと瓶の黒とにはたはたとあふるテントの反射

簡単に穂麦を染めた白い裂布折目きれついてゐる夏だ光だ

風だ四月のいい光線だ新鮮な林檎だ旅だ信濃だ

いい言葉だまつたく素朴な雄弁だ村長さんだなと林檎むいてゐる

さあプロジットだ地面いつぱいに敷きつめた大鋸屑おがくづを飛ばす早春の風

おれがほんとにうれしいことはそつと云はうか兄さんとここで見られてる事

固い胡桃くるみだとびしりびしり押しつぶしてるとなりの未醒みせが大きな両掌

食べさしの林檎とバナナを包んでゐる折目のついたハンケチの白光

木の鉢 其他

木の鉢に赤い漆でぼたりぼたりとなすりつけてある赤はんのき楊の花だ

もう春だな赤い漆をたらたら滴たらせ搔かきまぜてまた籠へらをあげてる

麦の穂をすうつと緑で描かいてあるなんと素朴な生地きぢの木の鉢

ざつとただ塗つたばかりだニス塗りの荒くゑぐつたつがざい 柵材の鉢

朱に金で落花生の花を描いてあるこれは露西亜塗だ百姓の鉢

ふかしたての赤馬鈴薯あかじやがいもをこてこて盛つて食べろと出した木彫科の鉢

荒くゑぐつたこの木の鉢の鑿目にも春が来ました輝く春が

浅い春です白樺の皮を剥はいで張るシガレット挿しの円い筒です

木を挽き切りぱんと二つにぶち割つた巻煙草入れの函と蓋です

荒彫の小さい書架です菓子のような赤い詩集を載せて冬です

白見たいなこの椅子を見ろゑぐつた木の根つこだ林檎畑の昼めしの椅子だ

見ろまるでゴツホの画室だ椅子だ椅子だこのゆがゆがの栗の木の脚

木の皿に一つごろりと描いてある紫の芽の出かかった馬鈴薯じゃがいも

青木の春だな花托の白地にころがした赤と青とのぽつとりした団たま

栗の木の花が咲きます農民美術の木彫のナイフが日に光ります

### 彫刻人形

荒彫のでろの葉かげの白い家田には女が犁すいてる春だ

おおこれは両手をあげてる天てんを見てる木彫の百姓ひやくしやうだおつたまげてる

冬の日の炬ばたで彫つたか豆人形胡桃かなにか割つて食べてる

寒い寒い信濃の冬の豆人形みんな頭から裂布きれかぶつてる

赤に黄の風呂敷かぶつて葱をかかへてまだ娘だろかたい雪道

北国のしやくんだ固い泣きつ面つらこれは彫つてるぽつり立つた子

髪を洗ふ人形は春を待つてゐる首の根つこで手を合してる

染色——凶案

矢車やしやの実で赤う染めたと笑つてゐた山のお百姓さんの壁掛の鹿

何もかも畑や丘から写して来たわしが図案だそのまま染めろ

塩原の夏

途中

どの村も桐の原つぱどの桐にも蝉がしいつく鳴いて朝です

雀の声だな雀の宮といふ駅だなやはり旅だなまた発車だな

宇都宮

旅さきで講演をして暑い日だのうぜんかづらが咲いて市街だ

この日 摂政宮殿下の行啓があつた。その少し前である。

暑さうにシルクハットがたかつてゐる立秋の駅のつばくらのこゑ

西那須野駅まで

西那須野だれも汽車から眺めてる夕顔の花の昼の強い陽

秋が来て夏が去いにますまつしろなかんぺうを干した那須の野つ原

西那須の青い曠野のあら草は風にまくれてきつい残暑だ

馬がゐて草も刈らいで放つたらかしだここの那須野の乳いろの花

何の穂かよく実がついた草土手の反射に沿つて汽車の午後です

## 電車に乗る

宮さまのお通りを待つ沿道の薄あかい花はみんな煙草だ

行啓おなりのまへ消防隊の朱しゆの筋すぢが並んで見てるたんばこの花

教科書の画ゑだ煙草ばたけのあちこちの低い藁家の日の丸の旗

唐黍たうきびの金髪がが早やふさふさと秋風に揺れる前に並ぶ子

西那須野行啓のまへのしんとした農園の白いいつぼんの道

朱の枠の幌馬車のかげが遠くに見えたんばこの花の秋の日ざしだ

## 溪の残暑

どの馬の白い日覆ひよけも反射してちりからと来る溪の残暑だ

へそ茱萸ぐみは誰も採らぬか溪岨たにそぼにかがやき垂れてしろい埃だ

この道はまつしろな道葛の花の紫の穂もとても埃だ

溪崖のひでりつづきに褪せかけた葛の花ですこの紫は

### 林の道

朴の葉の一枚の面めんの大ききよそれを何かが齒でかぢつてる

ちやうどかうした山擬宝珠の花だつたよいつだつたか二つ蕾んで一つ咲いてた

黙つてると親友の子の肩を押へた朴の木にほら瑠璃鳥が啼いてる

浴泉俯瞰

塩原の塩の湯、対岸の岩壁の下、溪流のへりに湯の湧くところがある。湯は水に交り、水は湯に温まつてゐる。ここに常にひたるのである。この溪の湯は高い楼上より俯瞰する時にいよいよ仙家のものとなる。

溪の湯に裸の男女がつかつてゐて一面に射す青い葉洩日

溪の湯だみんなはだかだ男もをんなも円光が発つて夏だまつたく

溪に見れば人間も自然のよい一部だ日がかがやいて波が揺れてる

あの溪に男と女がゐるそれだけでも夏は素朴な光に燃える

子が手を曳き浅瀬をわたる裸婦ひとり青く明るい陽と漣だ

溪の湯に髪洗つてゐる裸婦がある薔薇いろの手だ群青だ水は

夏だ夏男は立つてすつ裸だ溪流の水で背をこすつてる

裸婦ばかり溪の湯に寝て笑つてる天に小さな日が廻つてる

まるで鍵陀羅がんだらの浴泉の図だあの溪の湯に朱の煩惱が照り動いてる

今はもう子どもばかりだ溪の湯が金色に揺れて空が焼けてる

浴泉の処女

甘露木かんろぎのほのかな花に陽ひがさして湯にはをとめのうすべにの肌

溪がはの岩のぬめりを越す水に小さい素足がまるで魚だ

溪の湯をながめ見ほれてをさない眼だときをりは乳に水かけてをる

溪たにみづ水にあのほのあかい乳のいぼいまはひたしてほほと笑ゑんでる

うすべにのほのかな少女ほそぼそとなにか歌つてる腰に手をあてて

須巻を下る

ほうこれは牛蒡の花だな湯の樋とひの湯気がふっかけ濃いむらさきだ

二本の穂の穂草にとまる二羽のてふ揺れてゐる間まに見て下つてる

山の田の糯米もちの穂は霧雨の今の小雨の露つけてをる

首のべて母と仔とゐる馬小屋に刈りためた草は二番刈りの草

仔の馬が口で選つてるぼんぼんはまぐさの中のわれもかうの花

われもかうだ見ろ一茎ごとに海老いろの珠がついてゐるああ秋だ秋だ

母馬はうしろ向いてゐる仔の馬は馬柵ませで見えてゐる孔雀草の花

不二大觀

## 不二大観 三保遊行集

## 小序

大正十三年正月五日、智学田中先生の懇招に応じて、伊豆修善寺を発して三保の最勝閣に赴く。この行父母を奉じ、妻子と伴なり。淹留五日、或は晴れ、或は雨。而も不二の観望第一なる有徳の間の朝夕は我をして感懐禁ぜざらしむ。羽衣の松竜華寺の探勝ともにまた清閑極りなし。乃ち成るところの長歌一首ならびに短歌百七十二首を献げて些か先生の慈情に酬いむとす。記して小序となす。

## 不二を仰ぐ

沼津より江尻にいたる途上、汽車の窓より 五日

天つ辺にただに凌しぬげば不二が嶺ねのいただき白う冴えにけるかも

不二ヶ嶺は七面ななもも八峰やをもつむ雪の襲ふかぶかし眩びやくくわうゆき白 光

天ゆけば薄ら映ろふ雲のかけ不二のおもての尾への上にし見ゆ

雪しろき不二のなだりのひとところげそりと崩えて紫深し

雪しろくいとど晴れたれ御殿場の真上の不二は低く厚く見ゆ

鈴川の不二の眺めぞおもしろき寒き刈田ゆ絵凧あげたる

天そそり白く清さやけき不二が嶺はこのかの児すら見も飽かぬらし

常しろき山は不二の嶺あれ見よと為すなき父や子には見せつつ

よく見れば白くさやけき不二の秀ほのみぎり欠けたり地震なみの崩えかも

不二ヶ嶺はいただき白く積む雪せつの炎えんたてり真澄む後あと空ぞら

最勝閣に着く

清水港より渡船にて渡る 五日午後

大船の心たのめて三保が崎君が御み殿とのに参まる出来でにけり

風吹きてさむきみ冬を御垣下浜防風の茎の真赤き

小松生ふるここの御庭に来寄る藻の汐騒広しにぎはひにけり

めづらかに夕光鎮む不二ヶ嶺のおのづから保つ明日のよき風

最勝閣にまうでて詠める長歌並びに反歌

風速の三保の浦廻、貝島のこの高殿は、天なるや不二をふりさけ、清見瀉満干の潮に、朝日さし夕日てりそふ。この殿にまうでて見れば、あなかしこ小松叢生ひ、辺にい寄る玉藻いろくづ、たまたまは棹さす小舟、海苔粗朶の間にかくろふ。この殿や国の鎮めと、御仏の法の護りと、言よさし築かしし殿、星月夜夜ぞらのくまも、御庇のいや高だかに、鐸の音のいやさやさに、いなめの光ちかすと、横雲のさわたる雲を、ほのぼのと聳えしづもる。しづけくも畏き相、畏くも安けき此の土、この殿の青き藁のあやに清しも。

## 反歌

この殿はうべもかしこししろたへの不二の高嶺をまともにぞ見る

## 不二大観

## 最勝閣より

天そそる不二をまともに我が見るとこの高殿に参<sup>ま</sup>るのぼり見る

ここゆ見る不二のすがたは二方に裾廻<sup>すそみ</sup>ひき張れ清麗<sup>さや</sup>けきまでに

天そそりしろく反り立つ不二ヶ嶺の大き裾廻<sup>すそみ</sup>の張りのよろしさ

駿河なる不二の裾廻のおのづから張りつつし及ぶ海<sup>うな</sup>の原かも

不二ヶ嶺はいよよ清麗さやけし群むらやま山の高山はるが遥はるに天そそり立つ

不二の暁色

朝ぼらけ不二の尾への上へにのる雲あかの紫明あかうなりまさるらし

ほのぼのと不二の裾廻ひにしらむ燈ひのつらつら帆船ほふね行けりともなし

不二ヶ嶺はこごし裾廻むらやまの群むらやま山の柴山しばくらしいまだ夜明けず

ほのぼのと明けゆく不二のいただきは空いろふかし天の戸に見ゆ

空いろの裾濃すてこの不二の立てらくは夜のほのぼのものにぞありける

不二の尾はいまだはねむれ天つ辺の秀ほの片かたづら面よ紅みさしつ

愛鷹へ尾を曳く不二の片空の樺いろの晴れはいよよ風ぞも

明る妙たなびく雲の百重にも不二の芝山あけ暁ならんとす

豊かなる不二の茜ほの秀ほに燃えてまったく明けたり今日は晴ぞも

朝びらき明けゆく不二の大前に網あび曳びき舟榜ぐ三保の崎はも

海苔とり舟

有徳の間より眺む

笠雲よの昨よ夕べ見し不二のいちじるく寒けかりしか今朝のましろさ

清見瀉満干の潮の煙けに立てば柵寒しがらみし海苔のしがらみ

朝凍あさじみの海苔のしがらみつらつらに見れども飽かず小舟継つぎ来くも

朝風あさかぜの海苔とり舟はほの寒し棹さし連れぬ二人づつゐて

海苔とるとたづきありけり朝びらき小舟をふね揺りゆく棹手かなしも

海苔とると浜片かたづ附つきてゆく舟の目馴れし不二は見ずて榜ぐらむ

海苔の田は上潮うはしほ寒ひき海朶ひびの間に逆さの不二が白う明り来

春はまだ潮干に見ゆる海苔粗朶の列つらなみ竝つ続き寒ひう霧きらへり

この眺め明りて寂びし引き潮の海苔の田遠く清見寺見ゆ

海苔の田は水照凹むか海朶の間にかぎろふ舟の居処わがなく

蟹の子は百の千鳥か頬のかぶりひかり移らひ海朶の間にをる

こもりゐて誰が嚏ぞ海朶の間も海苔の香立ちて寒からしあはれ

柑子照る宿

河野桐谷君夫妻と令息の宿るところ。六日、散策の後、我らここに小憩す。

大き実の柑子照り満つこの宿は見てあたたかきここにあらむ

旅に来て去年こぞの今年の肩の凝りおのづゆるびぬくつろぎにけり

不二ヶ嶺の眺めゆたけく煮る酒のあなねもごろや父とよろしき

こぞり来しよしと思もひけりつつがなく遊べる子らを眺めやりつつ

これの子とあの子と遊ぶ日のたむろ柑子も熟うれぬ枝えにし垂りつつ

童わらべらに照らふ柑子ぞ携とせをなるそのこの母はころも干しつつ

閑しづかなる柑子の熟うれや母と子の睦むつぶこゑのみ庭にありつつ

## 午前の散策

藁すだれ掛け干す浦の日たむろは海苔とる蟹あまがやすらひどころ

干す海苔の簀すの辺のなづな伸び過ぎて咲き白らけたり浦の日和に

春は早や三保の砂地の日おもての白豌豆の翼はねがた状の花

松の間にここだ樽積くれむ洲の土手は行けどもさびし不二の見えずて

さざら波来寄る浜辺の朝あさ光かけは松の間あるき明るかりけり

三保の春うつらうつらに榜ぐ舟の榜ぐとは見えね行き進みつつ

## 不二の夕照

不二ヶ嶺にいや重きつもる 堅<sup>かたゆき</sup>雪のゆふべはあかく天<sup>あめ</sup>に燃えつつ

押し移り朱<sup>あか</sup>く騒<sup>さわだ</sup>立つ風雲の波だち雲は不二を目ざせり

片空に不二は晴れたれ風雲のゆふべはあかく吹き立ちにけり

不二ヶ嶺は見れど見あかね巻雲の夕照早し 紅<sup>あか</sup>う染<sup>そ</sup>みつつ

清見瀉<sup>ゆうでり</sup>夕照ひろし満汐の汐騒のかぎり舟の榜ぎつつ

昼の間を干潟に黒き海苔粗朶のゆふべは繁<sup>しじ</sup>に汐にひたり来<sup>く</sup>

風前<sup>かぜまへ</sup>の夕満潮のひとたひら渡船<sup>とせん</sup>は急<sup>せ</sup>けり音に爆<sup>は</sup>ぜつつ

夕明き横狭よこせの入江あはれなり葦村つづき舟混こめる見ゆ

舟べりに小箆うちたたき蟹が子の海苔洗ふ見れば冬も過ぎたり

不二ヶ嶺はまた雪ならし笠雲あさよの浅夜あさよは白く下おりゐる畳めり

雨にこもる

天霧らひ不二はかくりぬ三保が崎いたも濡れゆく千本松見ゆ

天霧らしふる雨ながら三保が崎いやしろじろに辺波寄る見ゆ

うち霧らしふりつぐ雨はひまなけど早や春めかし葦辺かすめり

潮ぐもり春の雨間あまに榜ぐ舟の櫓との音おこりて沖べさす見ゆ

S

砂畑の浅き井のべにふる雨のいろこそ無けれふるが親しさ

小閑

父母無聊なり

足<sup>たら</sup>乳<sup>ち</sup>根<sup>ね</sup>を下<sup>した</sup>心<sup>た</sup>におもへば浜松のさやけき騒<sup>さわ</sup>ぎ空<sup>そら</sup>に起れり

松風のさやけき聴けば生れ来しをさなき我<sup>え</sup>の縁<sup>えにし</sup>おもほゆ

松風に白<sup>い</sup>き飯<sup>いひ</sup>食<sup>ひ</sup>む春<sup>は</sup>さきは浜防風も摘<sup>い</sup>むべかりけり

この浜の梵ほんのんじやう音声おんせいのさみしくて遥あけきは空のあなたなりけり

## S

日の真昼つくづく守もれば不二の嶺の後あとの空をこもる雲あり

父母を高く思へば不二の嶺の後あとの空のはてなきがごと

これの子をしみみ思へば小松原松の千本の数わかぬごと

ただただにむか対むかひゐてすら母おも父ちちは見て慰なぐささむか対むかひいませり

父は父母は母とて長閑のどあらし足さすりをらす旅の春日を

酒よしと喜ぶ父の老らくを下した心こころには泣なきて清あし酒さけ選える

母父に妻がかしづくすがしきをした下心にはほめて言ことに云はなく

日はぬくしほのりほのりとたまたまは出でても見ませ不二を見がてら

母父やたづきなからしをりをりは打ち出歩りかす不二を見がてら

見の飽かず不二を眺めてます母のうしろでゆゑに我は泣かゆも

ましろ髯おほぢ祖父のみ髯かな愛しくも手ぐさとる子に垂たらしたるはや

吾が父や浜の小浜の行き還り何せ為さすらむ白き髯見ゆ

小夜

海苔粗朶のりそだに汐の煙立ちて寒き夜は地酒けもがもと父の宣のらすに

あかあかと葦火あしびたく屋やも小夜更けて汐霧きり来くらし沖つ千鳥よ

繁しじにうつ櫓の音凍こほりて闌たくる夜は荒磯ありその蠣も附たきがたからむ

### 早朝

霜の煙けの未明まだきはこもる渡し場に子と出て見居り汐の満つるを

子には子の白の毛帽子かぶらせつなにしか清すがし朝の霧ぞも

この磯の浜防風に置く霜の濃くも薄くも見てを通らむ

ここらにも蠣は附くやと水みなぐひ杙ひの干潟のしめり母と透かしつ

寂しくも見つつ笑ゑましも蠣の子は荒磯ありその蠣の母の根に添ふ

御穂宮

八日、桐谷君（令息同伴）の案内にて一同御穂宮に詣よづ。麗明、風無し

三保びとやまだ春寒く簀すを干して海苔たたき貼る唾つつけつつ

風速の御穂の御宮のきだはしは真砂吹きあげて松葉かき層かきめり

風速の三保の浦廻やこの宮にかかげし絵馬は皆船の絵馬

大船の波乗りごころゆたけくと絵馬やささげし三保の浦びと

参道まいりぢの砂道すなぢに根匍ふまばら松照れる春日をほくりほくりゆく

浜宮の御宮の松に掛け干して唐からいも諸がらも長閑のどに枯れたり

松ぼくりひろふ童わらべが片言のいつ果つるらむ童とし居る

皆行きぬ吾子あこよいそがむ汝なを待つとかの松陰に母の立てるに

松ぼくりしじに蹴あてつ松原や羽衣の松に行くはこの道

羽衣伝説

まことにすがも清し松原天馳けて舞ひくだる翼はねのけはひこそすれ

ひさかたの天つをとめがゆり掛けし羽ごろもの松はこれのこの松

さるさるし珍うづの羽ごろも取りかくし天つをとめが真素肌ますはだし見し

さにづらふ天つをとめが真素肌の乳房ふぶの苔み人は見にけり

天あまびと人は消けなば消ぬがに羽ごろもの袖乞ひ袴のめり草合歡の花

天向ふひとか羽ごろももうすぐごろも見えつつすべな夕さりにけり

ましら羽の天の羽ごろも夕羽振り消えにしひとのあやにかなしも

## 三保の松原

御穂宮より松原へ出づ。ここに世に謂ふ羽衣の松あり

風向ふ根疏ねあら浜松磯そなれ馴松今朝さわわし春日さしつつ

父母ようち出て見ませむら松の斜めみぎりに不二の秀が見ゆ

母おもちち父と妻と愛児まなごとうちいでてふりあふぐ空に不二はかかれり

西風にし吹きて春も浅きか立つ波の潮見清さやけみ石廊崎見ゆ

風速のまこと三保はやまさやかに騒さわぎこ榜こぎたむ船の多かる

風速の三保の砂やま清すがしくて遊ぶにはよき玉敷きにけり

おのづから玉敷き明る三保の浦や辺波洗へり清の照る玉

朝羽振る沖つしら浪辺に寄ると揺りとよもせり清し浦廻を

不二ヶ嶺を高みさやけみ三保の崎けふ父母とうち出来にける

世に愛し母の御伴とさもらひに清ししら玉選りてゐにけり

しら玉のをさなごころの揺りごころあなたづたづし母に寄りつる

大海の晒すしら玉清けみと手には揺りつつ遊ぶ子ろはも

遊び足り楽しききはも陽炎の燃えて跡なし浜の長手に

## S

うつつなく笑ふ子ゆゑに砂やまの砂すべりくだるも砂まぶれ我も

砂なだりもとなくづるれ踏み踏みてのぼらむ吾子あこがひた踏みのぼる

砂まろび遊びほれつつこれの子や丹塗にぬりの汽車は忘れ来にけり

## 帰途

砂畑の苺なの萎え葉もみぢして日のあたる辺を子の手ひきゆく

幼などち何か睦びてしなへ葉の苺のもみぢ踏みて来るかも

## 竜華寺

三保の松原より清水港へ出で、俣に乗る。短日、風寒し。

冬の田の刈田の眺めわびつつぞ俣つらねぬ風の暇を

冬の日も有縁うえんのひとかまうづらしまれまれながら畦あぜつたふ見ゆ

寒き田をあれや寺かと目にとめて俣急せかせり薄き日ざしに

竜華寺や彼あれと俣に揺られ来て行き過ぐる見ればこは鉄舟寺

さむざむと御堂の縁に端居して眼を放つ不二の明る妙はも

見のよろし不二の眺めはこの寺にまさるなしてふ今は眺めぬ

不二見ると君が住みたる有渡うどの山不二の眺めなごめのまことよろしも 日近上人

不二見ると君が臥これる有渡の山げにげに高う不二は冴さえたり 樗牛

吹きわかれ雲立ちわたる不二の尾の夕影寒うなりにけるかも

一いろに蘇鉄の気のみこもらへば夕さり寒しこれの御庭は

五百いほへ重なす蘇鉄の葉叢はむら冷え冷えて日の暮れたらし物の迫るは

日の暮は目見薄まみらよと宣のる父に蘇鉄は寒し層む葉の隈くま

短か日の御堂の障子かげり来て絵葉書選らむ時過ぎにけり

かの赤きは蘇鉄の実かと竜華寺を出でつつ訊かす父は後見あとて

風速の三保の日和のさだまらでけぎむく不二の尾根も暮れたり

山裾の柿の老木のはかな陽のたのみずくなに冬は宿れり

さむざむと詣でて帰る刈田道かもかく今日も暮れにけるかも

浅宵舟行

清水港より三保へ、童華寺参詣の帰途なり。 八日

月わかく糠<sup>ぬかほし</sup>星満てりかくばかり清<sup>すが</sup>しき夜空我は見なくに

眉引の童<sup>わらべ</sup>の月のほのあかり見の幼なよと舟は榜<sup>こ</sup>がせつ

月ほそくまだ珍めづらなり有渡山うじやまの山の端あたり黄ばみそめつつ

ほのしろき浅夜あさよふじ不二なれ帆柱の高きは青き燈ひをぞ点つけたる

星あかり凌しぬぎ榜こぐ子か黒船の艦出ともはづれて広うらみき浦廻を

夜に見れば不二の裾廻すそみに曳く雲の白木綿雲しろゆふぐもは海に及べり

### 星宿観望

夜、迎晨台にのぼる

高き屋にのぼりて仰ぐ星の座のいや遙まげくも真まじか近なるかも

目にとめて寒き夜空に澄む星の群多からし満みちにけるかも

夜の空に充ち満つ星の少くも目に見えぬ外もまたたきにけり

新月にひづきの早や照りながらみづみづし南天の星の満ちの細こまかさ

星の座の連れつつ隣る夜の天は見の親しかも廻めぐりつつあり

ひむがしの夜天やてんの星の大きくてひとつは光る不二の尾への上に

まつぶさに繁しみみに見れば星雲ほしぐもの微塵みぢんの光渦巻きにけり

夜の天あめはあやに清さやけし微塵みぢん数の珍うづの新にひほし星しぶき生あれつつ

寂しくも永久とほに消ゆなと離るなと仰ぎ乞ひのむ母おもちち父の星

我の星ある或は見ゆやと星空の五百重の霞透かしてぞをる

かの紅き妻もりほしが守星ほし前の世に薄雲ま纏まきぬ今もこもれり

幼な星あこ吾子こが守星さき幸かれと夜天やてんの遥はるに眼を放ち守もる

空のむた闇はあやなし星の座の今宵こよひの光息づきにけり

去年こぞ今年ことし国の禍事まがごとしきりなり夜天しゆくの宿ぬさに幣奉る

おぎろなき夜天の宿は幽けけど人こそ知らね火ほの気立けち見ゆ

天宮なかがはての中極なにして高しらす幽けき星もあれよとぞ思ふ

押し移る夜空の澄みやおのづから星座はての極はても傾きにけり

暁雲重疊

天雲の白木綿雲しらゆふぐもの五百重波いほへなみ波だちたぎつ夜は明けむとす

夜の雲の白木綿雲の寄り疊む五百重が奥に不二ふたは隠れりこも

天雲の不二の高嶺の雪雲は五百重も千重も下り疊むらし

望月の月映なして照る雪の不二のいただき暁ならむとす

浅春舟行

大正十二年二月、香取より潮来へ、潮来より鹿島へ、また舟行して帰る。

深靄

深靄に朝の間あかる日の居処<sup>をりど</sup>たんぽぽのごと幼なかる見ゆ

黄にまろきをさな童の日の居処靄はふかしと舟ゆあふぎつ

朝花の黄のたんぽぽはいとけなし波揺り来ればざぶり濡れつつ

靄ふかき河心に吼ゆるをさなごゑ<sup>かな</sup>愛し仔牛か舟に母恋ふ

下<sup>した</sup>ん田か早や犁きたらし這ふ靄の沼波<sup>ぬなみう</sup>撲ち来る土の香高し

傍ぎ着きて火もほのぼのと焚くならし沖田のガスの裾紅み見ゆ

つぶつぶと頭あたまはうかぶ鳩の鳥靄ふかからし鴨のごと見ゆ

舟揺りて子ら取つ組みぬ水ぎはにとてもあざやけき朝花たんぽぽ

牛連れて棹手つぎゆく舟の子ろ繁みおもふや紅の帯まく

ひと萌えの沼ぬべりのなづな露ふかし仔牛食みをりそのあさみどり

香取より鹿島へまゐる舟の路物思はずあらむゆたに傍ぎつつ

靄ゆぎごもり鹿島遊やう行ぞおもしろき蛙啼かへるく田の間あひを傍ぎつつ

露くさの花いろふかき沼波は傍ぎつつ繁し靄に見え来て

返照

赤の牛乗せ来る舟のひとうから夕風沼の広みにとあり

家の牛かい乗せもどる作さくぶね舟は夕安からしとろき櫓の音

櫓との音よき耕作舟や日を犁ときて雌牛揺り乗せ今戻るらし

夕光ゆうかげの水門出づる舟ひとつ牛まとも正面まともなり朱あけに燃えつつ

夕風の遍照光となりにける沼尻ぬじりの紅き太陽とポプラ

舟遣やらふ子らが棹手のたぶつくは夕照り淀か揺りこたふらし

遠明り夕沼ゆうぬとわたる舟の上に静立しづたつ牛の大きくは見ゆ

おほかたに真菰は焼きぬ沼の辺の芽の青しもよ母と子と居る

沼のべに黄のたんぽぽを摘わらべむ童ふかく嗅ぎて棄てぬ次の花をまた

牛の吼ほえおほらにとよみゆふべなり沼いつぱいの金色こんじきの空気

夕光ゆうかげのかがよふ舟に頸うなかぶし目見まみおとなしき黄あめの牛はも

この眺めゆたかに寂さみし黄牛あめうしも家路いへぢの舟に日を見かへりぬ

櫓をあげて棹さしつぐと夕沼や細長堀へ舟はひりつつ

潮来舟いたこぶね夕づく水照りみでゆきつめて寒き葦間に入るがさびしき

夕沼は遍照ひろしまれに来てかかる安らに会ひにけるかも

この安ら暮れであらめやよくぞ来て夕沼ゆうぬの水照りうち眺めたる

### 櫓の音

櫓を榜ぐと帆は巻き入れて春雨はるあま間香取の浦をうちも出でたる

舟びとや押手おして引手のゆりゆりに足踏み換ふるうつら櫓の取り

舟びとは榜ぎぞ足らへれ少くも櫓をし愛をしみぬ揺り遊びつつ

たふたふとあたる水の音とや櫓の取りのか揺りかく揺りその緒張りつつ

日の暮の水照<sup>みでり</sup>まぢかきひとたひらつぶりつぶりと鳩は出てゐつ

けける鳴く声は放てど夕照の日の方附くか眩<sup>まぶ</sup>し鳩見えず

舟にゐて春は炬燵のうづみ火のはつかに赤し<sup>しめ</sup>湿らひにけり

微塵光

宵空の微塵<sup>みぢん</sup>の光おぎろなし人は牛曳き家路をたどる

微塵光夕さり永し芽やなぎに燕のむれは頬をそろへつつ

表<sup>おもて</sup>より背戸の夜空ぞにほはしき柳しだるる川づら<sup>こ</sup>榜げば

色の隈くま揺り揺りひかる接つぎ襦どてら袍夜釣すらしか榜ぼぎのけぶかさ

たぶんたぶんとざんざら真菰揺る水のながれは絶えず榜ぼがで流さむ

十二橋三つはくぐりぬ糠星にせんだんの実あかの明あかる空見て

夜の靄あやに焚火する子の面あかあかりちかぢかと見つ潮来には来し

## 十二橋

落椿多し

落ちつばき外そつぼ方向そつぼきつつ菫しべわかし落つるただちを坐まりたらしも

春雨の地面ちべたのつばきちべたひた紅あかしいくらかは濡ぬれて動うきたるらし

しつとりと雨がなじんだ靱がらに明りさしてゐる紅落椿べに

靱がらも紅い椿も暮れかけてゐる暮れて動いてゐる雨がふつかけなのだ

花だまり椿のあかき背戸道はふる春雨の日暮らしどころ

空堀からほりはつばき層かさめりゆきつめて後戻りするその里道を

春雨繁し

板わたす用水堀のこぬか雨遠田をちこち近田もとみに萌えつつ

魚すくふ童が叉手さでの水あかりほの温ぬむらし尻はからげつ

背戸堀はふる雨繁し飼ひ鳩のつけ糸曳きて泳ぎつめつつ

雨はまだ粒つぶだつ橋の片てすりつかまりてのぞく子の面かほふたつ

雨空にせんだんの実は明るけど簑笠つけてとほる人あり

この里の春やさみしきおとなびて荏織をさでる子が梭手をさで尽きなく

春雨に薫かほすぐる子らひめもすや顔はあげずて暮れてしまふらむ

つらつらに遊ぶかへろ鶏かへろのをる庭はふる春雨にぬれて来にける

この雨や春雨ならし芽やなぎに帆檣ぬれて船ももやひぬ

碓氷の春

碓氷嶺うすひねの南おもてとなりにけりくだりつつ思ふ春のふかきを

裏妙義つつじにはへり日の道やいただき近う寄り明るらし

熊蜂の翅音ががやきおびただし春山ふかく営みにける

黄金虫こがねむし飛ぶ音きけば深山木みやまぎの若葉の真洞春ふかむらし

こちこちに若葉かがやく日のさかり四十雀飛ぶ山片附けば

霽もやごめにもえてかがやく朱しゆの若葉碓氷峠の旧道ゆけば

深山路はおどろきやすし家鳥かけろの白き鷄あに我遇あひにけり

山吹の一重の花の咲きしだる春山岸はるやまぎしのにはとりのこゑ

上つ毛へ碓氷をくだる春のくれ岨うづみ咲く山吹のはな

こなたさす使ひ童か見えつつも躑躅あかりをなかなか来ぬかも

前山さきやまに紅あかきつつじか日の照りて霞こめたり見さだむらくは

山路来てひたすらひもじ露の葉に満ちあふれる光を見れば

谿高くガアドそぎたち夏ちかし木もくぎやう橋はしゆ仰ぐ若葉の光

物のこゑひびかふきけばおほかたの若葉は和なぎてほど経ちにけり

谿ふかくたぎつ瀬との音もまじるらし嵐あかは明し一山若葉

春山の道のたをりにちりそめて板屋かへでは翼紅き莢はねあか

蓬伸びかへろ鶏群れたりとんねる隧道の断れ目の岨の光の崩れ 以下二首坂本の宿

日はかすめ清せやにこごしき妙義嶺の檜山のなだり夏立ちにけり

山すそは夏の日ざしのいちじるし楓の花もちらひそめたる

星野温泉

ほうほうと落葉松寒からまつし夕あかき鉱泉道のうねりをのぼる

製材の響けざむきたにぞひ谿沿ゆづは夕附きごやき早し材小屋が二つ

幅広き谿咀寒し牛乳買ひてつらつら戻る夕日の光

前山さきやまの夕光ゆうかげ寒きから松は材小屋の前を行きつつし見ゆ

早春

採氷池青みそめたりかへる子や頭重くも揺りをどりつつ

鷹来りおたまじやくしは食はまれけり沢べの芹もしじに青むを

塩沢村

上かみの田しもだゆ下田へ落つる水の音とのおのおのよろしぬるみたらしも

明るけど洩れ陽はさびし久しくも村にはこもる風かとおもひぬ

## 胡桃わりつつ

枯れはてて見のなごやかににける谿の河原の穂すすきの群

日向べにほのあたたまるわびごころ胡桃くるみわりつつ飽きもせなくに

押しあててかたき胡桃は手たちから力こめ掌にぞひしりとつぶしつるかも

ほろぬくき今日にもあるかしはしばも胡桃の殻を膝にはたきつ

## S

夕雨に踏みやはらかき落葉松の落葉は紅あかし沁みにけるかも

## 乳牛

朝あさ光かけに牝牛曳き出だししほる乳の雜あらくさ草をうつ新にひほとばしり

ゆたに立ちて乳をしばらせてゐたりけり母おやうし牛はよしこの朝あさ光かけを

おもおもと桶にたぶつく生なまの乳の青葉くさくてまこと牛の乳

## 翁ぐさ

子の眠れるまを妻と出て

熔ラヴァ岩アだに谷はよく霧きらふらし日が射してしばしば寒し妻とかがむに

天つ日の光はわかし翁つちぐさ地ちにぞあかく笑ゑまひ初そめたれ

山原の轍わだちにあかき翁ぐさ愛しきものを我が見つけるかも

をさなごやまだ覚めざらむ妻と出て翁ぐさ踏むこのしめらひを

林道を車きしませ来し鹿毛の眼が光りたり翁ぐさの花

浅間山麓にて

黄の蝶の林に住むは幽けかり落葉松らくえふしやうも芽ぶきそめにし

うち響き山のこだまのけ寒きは唐松の枝扱こき放つなり

早春

## 翁ぐさ

山原は轍とも思ふ道の窪に光り出て紅し花翁ぐさ

翁ぐさあかき手にとり土つきて冷ひやきにこげ和毛はじは弾きつつ歩む

## から松

落葉松のす黒き林露はなりまだ照り寒き光線ひすぢそそげり

から松にから松の影うつりをり月の山路にながめて来れば

芽に匂ふ落葉松原の夕月夜かすかにひびく田蛙のこゑ

月の夜の自動車道のか広さよ山蔭遠く蛙の鳴きある

小山田は早や水張れりいまだしも落葉松らくえふしようの梢は芽ぶかず

朱と紫

七面鳥

山茶花に雪ふりつもり閑しづかなり七面鳥のくぐもりのこゑ

雪早ししきり膨ふるる勢いきほひ鳥七面鳥の尾羽響なき鳴る

団扇羽うちばの佝くせの碧あき素すのあたま七面鳥に雪はふりつつ

七面鳥けける歎なげけば斑むらあを碧あの朱肉揺れ伸ぶくちばしあのうへ

真青まさをにかうべすくめて張り来る七面鳥の強面こはもての歩み

両つばさ地に張り歩む傲り鳥七面鳥は見らくしよしも

雄に添ひてかがよふ青き頸のへり七面鳥の雌の細みかも

世に愛し雌にし矜ると張る尾羽の七面鳥は燦々きらきらしかも

七面鳥おほらかなるかな雌を追ふと広庭をまろく大きくまはる

真向まつこうにおごり息づくむ張胸の七面鳥の脚の短かさ

印旛沼の紫黝くろき雪ぐもり七面鳥は膨れ真向ふ

膨れ来てたまゆら停る七面鳥乳ニップル頭の垂り紅く今燃ゆ

七面鳥翼ひびかし歩をやめず白き蛾のごと雪乱り来ぬ

七面鳥車輪のごとく張る尾羽のゐさらひ紅し雪吹きつけぬ

紫の生あれ来る雪のとどまらず七面鳥は啼あきにけるかも

雪の間を硝子障子に來寄り澄む七面鳥の乳ニップル頭の光

泡雪の斑ふの紫の車尾羽七面鳥も春を待ちつつ

雪景

刈跡はつむ雪早しこちこちを葦づか白う見えまざりつつ

印旛沼の狭き細江の向ひ丘早や目にしろし雪つもりつつ

夕照

刈り継ぎて夕照寒き出津の野や葦づかおほく見はるかしつつ

西寒し萱野の遙に落つる日のこよなく赤く一つころげぬ

土間の鳥屋

夕土間の鳥屋とやのはしごにい寝ぬる鳥七面鳥は肩高く見ゆ

鶏とりの栖すのくらしき梯子にのぼりて寝すて七面鳥は下寒むからむ

土間の栖すも夕寒むからしまだいねで層かさみおぼめくうつつ家いへ禽とり

吊棚にい寄りくぐもる数の鶏とりよきむ夜寒は見居りかまどび火の揺れ

おのがじし頸根うなねかい曲げ寝る鳥の今宵のねむりあたたかくこそ

吊りとぼす提灯の紋の抱茗荷湯にぬくみつつ見てをり吾れは

夜は寒しひとさしくべし風呂の火に驚は啼きぬ炭櫃のまへ

夜はふけぬねむりまどけき土間の栖すに何鶏かほの面か白う浮き居る

霜の朝

霜の置閑しづけくしよし朝まだき近しづき野にゐる家禽いへどりのこゑ

霜の野に朝日さし照りあはれなり鶏と鶩と七面鳥のこゑ

七面鳥朝明あさけの霜に居竦むは目のふち碧し葦づかのまへ

霜ふかし霜ふかしとて出でて見て一面の冬の朝日の光

朝を出て襜袍かかぶり聴きゐたり萱の濃霜のとけてひびくを

張る尾羽の白孔雀な如し円かなりひとむらの萱に霜ぞ満ちたる

いつの日か馬に食まれて葦莖の伸びはそろはで霜に枯れにけり

火をつけて萱の刈穂の束なりに燃えさかり来る音のよろしさ

野の土手を蛭触れ来る声はして閑しづかなる霜の朝やこの朝

霜の煙のいまだ流らふ萱の屋に山茶花は紅しよくうつりつつ

水禽

水禽の驚水かく屋敷堀楊は寒しいまだ芽ぶかず

印旛沼しろき明りのとほどほに葦鴨啼けり月の夜寒よさむに

印旛沼水口の細江に寝る鳥の青頸鴨のこゑはひびけり

余寒

印旛沼の出津の萱原萌えそめぬ夜頃は月の冴え返りつつ

## 浅春

暎路の芽張柳のあさみどり何かになへる人揺りて来る

## 初夏の光線

## 七面鳥

春過ぎて夏は日射の明らけし七面鳥のかがよふ見れば

朝あさ光かげに一羽出てゐる真向き鳥七面鳥はまだ啼かずけり

莎草くぐの紅べにいまだするどし七面鳥もそろあゆみぬ蹴けづめ爪をちぢめて

夏もやや鳥屋とやの外面とのもの照りつよし雛鷄ひなどりがかける突きころぶかに

真白羽ましろはの七面鳥の夏すがたかがやかに小さし野やを隔て見ゆ

張り来りたたら足踏む七面鳥いや照りしらむ陽の直射たゞさしを

真昼日のかぎろひ白き庭のうち七面鳥の足踏深し

落ちたまり黄なるつばきの腐れ花七面鳥はよそよそしかも

七面鳥なにかいらだつ日のさかりむら碧の朱の肉嘴にくくしひびかふ

七面鳥ひた迫りつつまじろがず肉嘴燃え伸ぶ真向まつかうの垂り

一気いっきに押しゆるぎ来て大きなる七面鳥のひたぶるの振り

かぎりなき陽の照り白し留り立つ七面鳥の影の大きさ

産屋戸うぶやどに堪へてこもらふ雌の細み春は日射も外とに白らみつつ

七面鳥照りゆるぎつつ歩ほは遅し尾羽響ほき鳴るひと足ごとに

七面鳥尾羽鳴らしつつ廻り居り春埃立つ明るき庭を

春まひる七面鳥の尾の張りの照り円うしてそよぎやまなくに

張る尾羽の真横見せゆく揺り歩み七面鳥は音深めつつ

鳴り深む七面鳥のしづけさよ蛙啼かはづく田の遠く照りつつ

ほのぼのとまなぶた紅き巢守り鳥七面鳥は卵いだきぬ

栖すにこもる七面鳥のひたごころ俵にのぼる陽の目よみつつ

栖に向ふ雄の七面鳥真昼なり張りふくれつつおもむろにはひる

夕遅き厩のまへの日の光七面鳥は行きとどまらず

さうさうとい行きめぐらへ安やすからず皺しわばみ碧き七面鳥の面つら

立尾羽たてをばのしみらに光る日のをはり七面鳥も遠く見て居り

夕光ゆうかげのさわさわと揺る尾羽の張り七面鳥がうしろ見せつも

野へ出て

出津の野は莎草くぐの芽紅あかし芹摘むとそこらこころを吾がかがみつつ

二ふた方かたを雲雀ひばり囀れりうち羽振り大きなる円に小さなる円に

二つゐる雲雀とし聴きうら安し吾がつむ芹は籠にふえつつ

二つあがる囀りはあれうらがなし雲雀啼くとしただに聴きつつ

### 鯉

右ひだり生きの真鯉をひとつづつ手づかみて来る印旛びとなれ

両もろの手にひたぶる抱く鯉ひとつこれの童は泣かむばかりなり

### 茱萸

朝<sup>あさ</sup>光<sup>かげ</sup>のほのくれなるの菜<sup>ぐ</sup>菔<sup>み</sup>のはな目にあき<sup>あき</sup>らけき雨<sup>あめ</sup>を保てり



海  
阪

## トラピスト修道院の夏

## 正面

烏賊乾してただ日ひなくさき当たうべつ別の荒磯ありその照りよ今は急がむ

修道院へ行く道暑し絮しろき河原ははこも目につきにけり

山独活の花明らけしおのづから洩れづる息をうれしみ休む

空のもとトラピスト修道院建てりけりこの正面の昼のしづかさ

燕えんばく麦は今刈り了をへて真夏なり修道院にいたるいつぼんの道

裏山の青の円山のぼりをりよく群れしかも人と牛と羊と

女人禁制の札あり

影かげとも面は朝から暑し来て通る修道院正門のみそ萩の花

修道院の玄関の前に立ちにけり麦稈帽をとりつつ我は

修道院朝風暑し小手鞆や花あぢさゐの藍も褪せつつ

白しろさうび薔あか薇ふふむは紅し修道士のひとり前は前を歩みるにけり

礼拝堂

聖堂のステンドグラス午ちかしをさなかるかもこの基督は

## 玄関の内部

乳をふふみ幼きいえますなり時計の針もめぐりつきつつ

## 行列廊下

基督の受難の額の裏のかけ廊下の青きこの光線を

行道ぎやうだうの波型寄木踏むべくはこよなき光流らひにけり

## 階上の寢室

一二側ふたがはに寢室の帷垂りとばり白し真昼は空しそよりともせず

照りつづき白き帷の真昼なりひたけうとしもトラピストの寢間

とことにはまかすめとらぬ修道士のむなし寢部屋よ日のほてりつつ

ORA ET LABORA.

祈り且つ働けと云ふすなはちよしかの修道士は丘に群れたり

日とともに出でてちらばりうやうやし彼等は空をいただきにけり

牧ぐさのくれなる柔<sup>やは</sup>きうまごやし愛<sup>かな</sup>し麻利耶よ彼ら夢みぬ

木工場の内と外

言<sup>もの</sup>いはず群れる木を挽く毛ごろもの褐<sup>くじ</sup>の頭巾の日の光はや

木履サボウをこつこつと刳り暑からし息づきあます深きしづまり

修道院の昼はてしなしほこぼこと人歩むらしき木履サボウの音あり

後園

よく掃きて日のさしあかる道ほそし林檎のもみぢちりそめにけり

木履サボウはきてさびしがり行く日のさかり木槿の花が白う見えつつ

更にうしろは畑である

弥撒ミサ過ぎぬ修道院裏は毛の紅きたうもろこしの一面の風

墓地があつた。外国人の神父たちも埋められてゐる。

から松の木洩る光線こもひすぢや目にとめて地に幽けきは奉教人の墓

トラピストの墓原の外とよ南風みなみ吹き唐黍の紅き毛のそよぐなり

真夏日の光に聴けば遠どほし緬羊の声は人に似るなり

ルルドの洞窟にて

美くはしみと外とに出て見ればこの空や七つの岬海に向ふ

牛舎近くに出て見る

夏だ夏だトラピスト修道院の柵の外に遊ぶ子供がまだはしやいでる

照り強いゆきかへらひ憤るここの七面鳥は胸羽根真青  
むなばねまさを

青刈の花ひまはりを食む牛のはてなき暑熱しよねつ我は見にけり

草積みて香にほひまさをき馬ぐるま牛舎近くを駈け込み来今は

赤松林を通ると蘿風君の旧居があつた。

岩清水しんしんとして夕近し赤松の幹の映れる見れば

谷隈の小さき泉の夕ひかりわれはひたにし口をつけつも

赤松の林を過ぎて夕づきし広原は見つ馬車の駈くるを

夕づきて何かひもじきひたごころ赤松の原をくだりつつ来し

つつましく君が住みけむ跡どころ谷沢越えて我は見に來し 消息

フオクとは木製の一間ばかりある草搔きのことである。

フオク持つ人もくもくと搔き搔けり燕えんばく麦えんばくならし黄の穂かがやく

頸根うなねつきかさりかさりと夕さむし草ほこり搔く修道士ふたり

晚鐘が鳴つた

修道院鐘を鳴らしぬ安らけくけふのひと日も晴れて暮れたる

修道院夕さり安し栗いろの群の毛ごろも竝み帰りつつ

## 月夜

月出でて明るき宵や修道士たち今は帰り来木のフオクもちて

丘の上<sup>へ</sup>に大きくうごくフオクのかげ月の光にまだ一人ある

## 晩禱

夕闇の御堂のいのり声もなしあかき燈<sup>ひ</sup>ひとつまたたきにけり

こよなくも聖<sup>せ</sup>体<sup>たい</sup>盒<sup>ごう</sup>のほふなり何か美<sup>め</sup>しくわれが泣<sup>な</sup>かゆも

客館で私たちは晚餐にあづかった。赤いボルドオはぼんぼん抜かれるし、アル  
 コールぬきの麦酒も出た。

修道院の窓あけはなち晚餐なり甜瓜メロンがまろし月の光に

修道院こよなく明し燈ひのつきてこの焼豚の塊くれの美めぐしさ

われ立ちて今は踊らむ月あかり深めば鐘もゆり傾かしぐなり

月がいい。前庭に私たちも出た。「おんこ」とは「いちゐ」のことである。

円刈のおんこに光る月のかげまさしくここは修道院の庭

聖堂の夜の連禱もはてぬらし月に出でてをりふたりみたりのかげ

修道院の玄関の前の月夜なり神父アツバ歩めり話をしながら

天の露いよよ繁みか後の野に馬放たれて涼しこの夜良よら

丘への上に大きちひさき馬のかげ月夜すがらに見えてゐしかも

月の夜をしきり傾くすず鐸のかげ友は見しちふ我は聴きつも

客館の横にポプラ並木がある。

ポプラ葉のかがやく見れば常ながら空のあなたよ見の美くはしかも

梢うれつづきかがやく久し日のさかりポプラ嵐に雀流らふ

今日もいい晴である。

修道院鐘の音美くはしまさしくもこのみ空は蒼うかかれり

空晴れて鐘の音美くはし苜蓿つめぐさの受胎の真昼近づきにけり

空晴れてまた事もなし山なだり茶の毛ごろもの群れのぼりつつ

乳酪工場の附近を逍遙した。

山鳩の居りて閑けき葡萄畑青うこぼるる日ざしなるかも

さみどりのキヤベツの地より湧くところ人つくりをり新しき乳酪バタ

帰途

わが歩みひたすらさびし昨日見し木槿の花は白かりしかも

アイヌ村風景

師団道夜の明けて広しさるさると唐黍売もふれて来にけり

この朝かげすばらしくよし毛のあかき唐黍を呼べば馬車にはふりこむ

ひた駈けに馬車を駛はしらしすがすがし唐黍の穂の朝日なるかも

朝の日を馬車はかへしてあゆむなる大豆畑の露くさのはな

畑つもの豆の葉よりも露くさの瑠璃いろ深しすぐアイヌ村

朝の気の流らふ広き大豆畠旭川郊外に来てをりわれは

耳とめてこの野は広しこちごちにひびかふものの音のかそけさ

水の音今は聴きゐつこのあたり隠元豆の花がしろしも

あるアイヌの家にはいつて、お婆さんに唐黍を焼いてもらった。二首

たうもろこし焦げてにほへりはるばると遠来し旅を堪へてゐるかも

唐黍の焦ぐる待つ間よつくづくと摂政の宮の尊影みかげを我は

おんこ彫る爺おぢのアイヌがあぐらるをい寄り見て立つさぶし和人しやも我

日の澄みを毛深きアイヌ立てりけりほろびつつあるその厚志あつしぎ着を

家屋ちせの外との熊バウレツプチス檻かなこのあした愛し仔熊も起きてゐるかも

往還めのくぼに眼窩ふかき子は立てりほろほろと乾かはく直ひたつち土の照り

除虫菊

## 鴨

韃靼の海、波のうねりに揺られるて遊べる鴨か大きうねりを

平らにぞ風ぎ青みたれ泛く鴨のかくろふ見れば大きうねり波

うねりの深き凹みへ亙る見し盛りあがる波を鴨の乗り来る

揺れあがる波の平になりにけりしばしとどまり鴨の確たしかさ

## 海上

韃靼の海うなぎか 阪黒くろしはろぼろと越えゆく汽船ふねの笛ひびかせぬ

かき坐り仰げば巨き帆ばしらなり我この汽船ふねをひたに頼まむ

耳あけて深くしづもる四五本の通風筒の前の照なり

波の上にはぼつかりとありはてしなし走れる黒き煙突のかけ

音江村

日ざかりの道のべゆけば株だちてまだ柔かき箒草のいろ

除虫菊白きを見れば新にひみどり唐黍の毛もかき垂りにけり

歩み来て林檎畑にはひりたり日の明りつつ広く閑けさ

夏山の林檎畠の日のくもり白かけろき鶏の閑けかりけり

いっちゃん  
 一 巳の屯田兵の村ならしややに夕づくこの 瞰望みおろしを

日は近しくばふ牛の鼻づらを見つつ過ぎたりかむぼちやの花

牛小屋のおもての紅き巴旦杏手のとどくところはみなもぎりたり

蓮のはなほのけく赤しはひり来てここの牝牛の乳をもらひをる

澱粉靴といふものを子らはいたりける林檎畠を出て来る見れば

常掃きて日射透ひざしほせばうやうやしこの牛小屋の青牛のかけ

家の戸に去勢無料とするしたり夕光ゆふかけあつきこの往還を

## 青き林檎

北海道深川町の郊外、音江村にさる林檎園あり。たまたま町のK氏を訪るるに、今は人妻ながらそのKのそのかみの恋人なりと云ふ女性ありて茶を供し、まだ小さき林檎などむく。我もただ庭を見、池をながめて、言葉なくるぬ。

寂しくてなにかまぶしき日のくもり青き林檎をながめるにけり

うすうすと林檎の梢葉染みにけり百舌の翔りはいまだ暑きに

つぎほなく閑けき夏や時あかる蜜蜂の翅音そこら響かふ

風たちて涼しく皺む池の面に百日草の影もうつれり

役場の前のさる歌人の牛飼の家にて

音江村一覽表をもらひたり役場のまへの鶉豆の花

直<sup>ひたつち</sup>土に子らかき坐り夏おそし種人蓼の立枯れの花

傾斜地の虫除け菊のしろき花いまはつぶさに見て下るなり

深川郊外

遠山に白虹<sup>ふ</sup>降りる閑<sup>しづ</sup>かなりこの石狩の国の大きさ

白壁の反し陽見ればやちだもの木立の木膚かがやきにけり

オホツク海にて

一等船室

のうのうと謡のこゑはそろひけり陸ひとつ見ぬ海に來にける

海に來てはたやあはれか老らくの連多くして謡ひほれたる

豊けてかへてあはれぞまさりける謡のこゑの風にそろへる

能のワキの囃の笛を吹く人あり

能の笛ひやうへうふれうと起りけりオホツク海の真夏日の風

空のむた陰<sup>かげ</sup>りて円きわたの原笛のひとつの音いろ響かふ

薄ら陽

いつしかと日光<sup>ひかげかへ</sup>反さずなりにけりオホツク海の波の穂のいろ

オホツクの波は光らずたどきなし甲板にひとつ我の足音

オホツクの風はてしなし日の洩れて未あかりしが照らず止みたり

雲の上を日の行きながれさむざむしオホツクの海いまは観にけり

国境安別

## 安別沖まで

巻きなだりいやつぎつぎに重き層かさむ波の穂冥くらし海豹あざらしの顔

日の遠き北に來にけりこの海やたえて光らぬかぐろき荒波

名も知らぬ黄なる花むらなだり咲き目もあはれなり時化波しけなみの隙間ひま

凄まじく海ぞ荒れたれ目じろがず人は乗り來る舟の舳への反そり

## 砂浜

昆布食こぶみて慧さとき鼠か長き尾の乱り走りぬ波裂くるとき

ぺんぺんとなづな実りて群れにけりとどろきくらき波なだり來ぬ

海豹<sup>あざらし</sup>は頬の髭黄なり孔まろき白き頭骨<sup>づこつ</sup>となりはてにけり

鯨乾場

日の光薄き浜びの板びさし春の鯨は燻し了へにし

マントの黒き頭巾のふっかけ雨巡查は佇てり露の葉のかげ

浜びさし雨あぢきなし紙旗の日の丸の紅も垂りにじみつつ

ふたつ眼の毛皮<sup>ひぐま</sup>の鬮<sup>ひぐま</sup>つるされて吹っかけ過ぎぬ網小舎の雨

この雨の樺太<sup>おほぼこ</sup>車前草<sup>やわ</sup>踏み柔<sup>やわ</sup>み村かたつくと親し車前草

夏、夏、夏、露西亜ざかひの黄の葎の花じやがいもの大ぶりの雨

夏もなか黄なる鈴菜が明るなり北の日本のいやはての村

日のひかりいとど薄きを菜のはなのうつしく咲きて黄なりこの浜

菜の花に藻くづ昆布こんぶの塩じめば北の日本の春もいぬめり

鯨粕脂あぶらのり来る溜ための面雨おもは沁まずてはねてちりつつ

ななかまど

あかき実のななかまどといふ藪の崖子供飛びをり鳥のまねして

ぎやをと啼きまた声継つがずどしやぶりの実のあかき木に海猫はゐる

## 天測点へのぼる道

玉ぼこの道つくりびとすがすがし露と萱とを諸もろに刈りそぐ

ぬかるみの新墾にひりみち道の吹きあげ雨そ反り立つ露の裏しごきうつ

吹きつけて息づき過すがふ霧の塊くれ樺太露の葉をひるがへす

茎高の葉広露うつ雨の音今はたしかに国境に来し

## 国境標附近

驚ひとつ石のうらべに彫りにけりそなたにあらき虎いたどり杖の花

雨、雨、雨、虫くらひ葉の音繁きこの虎杖は露西垂領の花

椴松とどまつの霧たちかくす日の在処ありど気流の冷えがとみにし著しるし

ここの空きびしく寒し椴松のうれを久しく霧はながれぬ

巖いづかしき国の境や椴松に雲白うゐて凝こりたりけり

北樺太ピレオの村も寒むからし蝦夷松疎く雲こごり見ゆ

獺かりうど人のピレオ出て来る寒き影はたや向ひの尾に立つらむか

国思ふ心はもとなどどまらず雨はさ青の芒のぎを流らふ

雨は小止をやみ草山なだりさみどりなり日本の村へ一氣にすべる

韃靼海西風吹きあげて立つ雨の色まつしろし潮さゝるのうへ

時化後

小学校にて番茶を饗せらる

黄の花の鈴菜畑のざんざ雨鳴あがりまろき眼をして

日本のいやはての北の小学校水蠟樹蕾みて夏休みらし

隆盛の大き目の額見つつ出てすずろに紅し虎杖の花

電信局にて

ワレライマヤコクキヤウニアリ、むらさきの花じやがいもの盛りに打電す

じやがいもの花の香しるき頼信紙このふきぶりに濡らしけるかな

缶詰工場は休みて商品陳列所となれり

雨しげきにしんかんば鯁乾場の実のなづな国の境も見つくしにけり

樺太犬のそりとを居れ雨しとど吸ひふくれたる葱の玉鉾

われさぶしふきで噴出の清水大木桶の溜ためあふれるるそればかり見る

こんこんとしみみゆり湧く旅ごころ水は噴井ふきゐに盛りあがりつつ

うらさぶしうらさぶしとを選びゐたり 燻いぶし鯁にしんの黄の腹の焦げ

## 端舟に乗る頃

夕づきて遊ぶ童わらべの寄りどころ蟹の甲羅の朱も古りにけり

時化しけあと後の海ひたくらし向ひ立つ女の子がふふむほほづきの音

## 幌馬車

## 音江村

山方はけはひ幽けくなりにけり馬車ひとつ行けり虎杖いたどりの原を

幌の馬車とめつつさびし虎杖の虫くらひ葉の日ざかりの照り

## オホツク海拾遺

波のみね千重しくしくにかがやかず海豹島も目路にかくりぬ

## 松島

みちのくの千賀の塩釜雨ながら網かけ竝めぬほばしらのとも

みちのくの千賀の塩釜雨に来て木の橋わたる大き木の橋

千賀の浦夕立つ雨に船立てて雄島のはなに着けば暮れたり

松が根にきちかうの花開きけりこの松島に今朝は思はむ

松島の海岸どほりまれまれに人あそびゐて日射秋なり

## 瑞巖寺に泊る

大寺の厨のそとの水ために清水あふれて朝焼けにけり

瑞巖寺の朝餐あさげの魚板響くなり顔洗ひつつよしと思ひぬ

僧たちと朝餐の席にならびたりつつましくしてほがらかにあり

飯櫃にたきたての飯の湯気たてり大寺はよしこのあかときを

瑞巖寺をまかりいでつつ朝早く松島が見ゆ雨後の松島

松島瑞巖寺前のさざら波施餓鬼すみたるあとのすずしさ

## 金華山沖

潮のいろ深むを見ればみちのくの金華山沖に今かかるらし

海に見て地球のかたち円まるしとふ童わらべは小さしよろこびにけり

帆綱張りゆゆし安やすけし太敷ふときて敵いづのほばしら根生ねひ据すれり

真ま上うへ空ぞら飛とぶ雲は迅やしまさしくは巨おほきマストの揺れかしぎつつ

かたむくと見つつ待つまをとどろかず巨おほき濤なみ凄あがし騰ありきりたる

まなかひに落ち来る濤あとの後なみの立ちきほひたる峯のゆゆしさ

躍り立ち羽搏うち巻まき立つ波の穂のあひだに徹り青空のいろ

勢きほひ立ちただち砕くる波の穂のしぶきが飛ばす潮の珍うづだま珠

巻かへき翻る波のなだりに飛ぶ珠のとどろきの泡ぞ白く競へる

渦うづしほ潮のたぎつ潮しほなま漚しづまらず浅みどり透くその白き泡を

潮漚の消ゆと浮ぶとおもしろと見つつ見あかず騒さやぐ潮漚

海わだなかに夕餐の銅どら鑼のひびくとき火星は赤くあらはれにけり

青あをうなばら海原夕さり来れば壮麗なり夜の高麗こままる丸は灯ひを列つらねたり

海わだなかに音かがや耀けり夜はふけてしんしんと進む生いきもの物高麗こままる丸

## 津軽海峡

まさしく津軽海峡に入りにけり早や見る青き草崖のいろ

とどろと雲噴き騰りあざやかに汐首岬の青の雑草

岬の雑草と雲のあざやかさ汽笛太く吼えて挨拶す汽船は

津軽の海南風吹き晴れ午前なり汽船ゆきすすむその中道を

煙曳く煙筒並び爽かなり高麗丸はよしこの海峡を

この汽船の巨き煙筒けぶりなびき渡島の子らは此方見てあらむ

津軽の海雲はろばろしいにしへや大群のアイヌここ渡りけむ

津軽海峡はや秋ちかし雲の秀ほを耿こうとして渡る小禽の群あり

仮装行列あり

この汽船や笑らぎ照り恍けはてはなし海峡の午後をゆきすすむなり

大船に日は照り満ちぬ紅つけてをどる一人が影の短かさ

ひと船の愛し戯けもはてにけり津軽のかたに日は隠りつつ

津軽の海風に群れ寄る味鳧の命なりけり粒黒くある

つらつらに鴨の泛き来る蒼の波うねり大きく見えにけるかも

渡島の縦の赤雲並び立ち見のはろばろし星の透き見ゆ

天に三層あり、中なる天を「星のゐる空」或は「騰れる空」と呼ぶ（アイヌ昔  
噺）

ぬか星の騰れる空にさ霧立ち今宵は清しすが蒼海さかの境

月のもといとど巻き立つ赤雲のかがやき近し崩れずあらなむ

鴨

沖つ鳥鴨のかしらのま青さをくてつらつらかなしさを泛きにけるかも

もこもことまだ盛りあがるたづきなき波の胴腹に鴨は居をるなり

まなかひにおほにそびやく蒼あをの波かなたなぞへに鴨は居らしも

つれづれと鴨のすべるぞおもしろきこなたなぞへになり来る波を

夕風あその海、波のあひさにゐる鴨のかなしき声は空にとほれり

ここ過ぎて草は空より新なり汐首岬しほくびさきといふがかなしき

正眼にも夏は光りてとどろきぬ汐首岬の雑草のいろ



# 青空文庫情報

底本：「白秋全集 9」岩波書店

1986（昭和61）年2月5日発行

底本の親本：「海阪」アルス

1949（昭和24）年6月15日

※「夕光」に対するルビの「ゆうかげ」と「ゆふかげ」の混在は、底本通りです。

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号586）を、大振りにつくっています。

※小見出しよりもさらに下位の見出しには、注記しませんでした。

入力：岡村和彦

校正：フクポー

2017年10月25日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 海阪

北原白秋

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>